

---

# 花と蝶 R・N・O/ 2

夜方

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花と蝶 R・N・O / 2

### 【Nコード】

N1925X

### 【作者名】

夜方

### 【あらすじ】

悪徳のマチと町との物語。

ロッソ・ネロ ウロボロスシリーズ第二話。

後に「ウツバスター事件」と呼ばれるズサンで間抜けな事件、その顛末。

## 花と蝶 1

何となく頭が重い。

ベッドから起き出してはみたものの、Ｔシャツを着替え、ジーンを履くと、二力は再びベッドに戻り腰を下ろした。コンクリートの床にベッドが設置されただけのその部屋は、冬の日にはなおさら寒々しい。

昨夜眠りについたのが何時なのか、そして目覚めた今が何時なのか、時間の間隔も分からないから、ひよつとしたらこれは寝すぎたのかもしれないな。そんな事を考えながら、二力はそつと目頭を押さえた。左の親指と中指を目頭にあててぐりぐりと動かしていると、頭を重くする別の理由が染み出しては脳裏に広がっていった。

一度しか掛けてはならない約束なのに、昨日は電話が二度かかってきた。

無視してしまえという気持ちとは裏腹に、自分は二度目の電話にも出てしまった。

何事にも柔軟な対応が必要だ。それが世の為、人の為なら尚更だ。この仕事を始めるに当たって蝶子が言った言葉だ。その柔軟な対応を二力なりに実践してみたわけではあるが、ルールを曲げてまで行った対応は二力にとって不安の種にしかならなかった。

一度しか掛けてはならない電話が二度目に掛かってきた時点で、自分は降りて早々と帰ってしまうべきだったのではないか？ 約束違反は向こうの方なのだから、蝶子も責めはしなかっただろう。

かつては、臆病は罪であると考えた自分がいた。だが、勉強というにはあまりにも手痛い羽目にも遭い、慎重に行動できるようになった。その二力の感じる不安は、やがて微かな後悔となり頭の周りに押し掛かってくる。

「……仕事はきちんとこなしたさ」  
自分を納得させるように呟くと、ベッドからようやく重い腰を上げた。

部屋を出て簡素な造りの螺旋階段から見下ろすと、コンクリート打ちっぱなしのただ広い、味気のない部屋のＬ字のソファの右端に座る蝶子が、何となくテレビをつけたままパソコン上の自分のブログを更新している所だった。

テレビでは昼のニュースをだらだらと垂れ流している。

「昨夜はお疲れ様」

蝶子は首だけ少し振り向くと、まったくおかしい事などないのに口元だけニヤニヤさせてそう言った。

普段は冷静で無口な蝶子が口元だけニヤニヤしている姿を最初見た時、こいつは病気なんじゃないか、二力は本気で思ったものだ。

オシャレというものには全く無縁そうではあるが、口元のニヤニヤさえなければ蝶子はそうとう美人の部類に入と思う。それが証拠になるかどうかは別として、無意味に行動的な彼女は、かつてネット上のアイドルとして割りとう人気物だったらしい。

一度、そのニヤニヤを止めたらと二力が言ったら

「笑顔の多い女性の方がもてるんだよ、二力は女心が分かってないね」

と返されたので、それ以来何も言えずにいる。

味気のない部屋にはコーヒーの香りが立ち込めていた。

昨夜仕事から帰ると蝶子はすでに眠っていた様子だったが、仕事の次の日は蝶子が朝（昼）ご飯を作るという約束になっていた。それは彼女流の気遣いに他ならなかったが、料理は断然二力の方が上手かった。

螺旋階段を下り、カップにコーヒーを入れワンプレートに乗ったトーストと目玉焼きを温めなおすと、二力はＬ字のソファの左側に座った。

「仕事どうだった？」

右手でマウスをちょこちょこと動かしつつ、パソコンとにらめっこしたまま蝶子が聞いてきた。

「無事、終わったよ」

ニカは左の目尻の下にある古傷を少し掻いた。

ちらりとその動作を見た蝶子はニカの気がかりを感じると、パソコンをいじるのをやめニカの顔を真っすぐに見つめた。

「……ただ」

ニカは言葉を続けようとした。だが、垂れ流しのはずのテレビがそれを許さなかった。ニユースは地方の話題へと切り変わる。

「今朝、K市在住の会社員、ワタナベ ヨシノブ渡辺由伸さん四十歳が死体で発見されているのが……」

ニカも蝶子テレビに目が釘づけになる。

テレビには、昨夜ニカがボコボコした男が映っていた。

蝶子はすぐにアドレスを打ちこむと、パソコン上の自分のブログから別のサイトへと飛んだ。キーボード上でせわしく指が動き最後にENTERキーを押すと、小さな黒い点が蜘蛛の子を散らすように広がり、やがて表示されていたタイトルページの「ウツバスタ」は闇に吞まれて完全に消えた。

それを見届け「さて」と呟くと、蝶子はニカの方へ視線を戻した。「逃げるわよ、ニカ」

相変わらず口元はニヤニヤしていたが、目は全く笑っていなかった。

> i 3 2 1 6 4 — 1 2 9 9 <

ロツソ・ネロ ウロボロス

花と蝶

粉ふき芋、マッシュポテト、ジャガイモのみのポテトサラダ。

そんなに悪いメニューじゃないと思うけど……。

この一週間、大安売りという事でまとめ買いしていたジャガイモ料理が続いていたが、自称美食家の彼には不評らしい。

隣を見ると男のたしなみの象徴たるいつもなら完ぺきにセツサれた彼の、零れ落ちそうなナチュラルリーゼントにその面影はなくただただ、だらしく彼の顔に覆い被さっていた。

タバコを買いに行くのだという。しかし、食欲不振からの空腹と、視界の悪さからあちらこちらに衝突しそうになる姿を見せられては、さすがに心配になってサカキの買い物にヒイラギは付き合う事にした。

いまだ残る活力の表れのような、元気に立たせたパンキツシュヘアーのヒイラギの心配をよそに、事務所からの道すがらサカキはすでに二度電柱に衝突していた。タバコ屋まではまだしばらく歩かねばならないから、再び衝突、そして大破の危険性は残っている。

完全に予定が狂った。

昨夜は久しぶりの仕事だった。何の事はないマンハント、ある組織の裏切り者を捕まえるだけの簡単な仕事で、他に参加した追っ手は自分達に比べれば明らかにランクの下がる連中ばかり。

案の上、他の連中を出し抜いて裏切り者を追いつめたまでは良かった。

だが、それを最後の最後に、横から現れたハイエナにかつ攫われてしまったのだ。

そいつらがしゃしゃり出て来るのも予想外なら、完全にしてやられるというのも予想外で打ちのめされたわけだが、久しぶりに上手いものが食えると意気込んでいたサカキの落胆ぶりたるや、相当なわけである。

三度目の電柱との衝突をなんとか回避したサカキの横に、後ろからやってきたライトバンがスピードを緩めて並走する。

助手席の窓が下がり、中から女が顔を出した。

ルーズボブヘアの黒髪／小さな貌／猫を思わせる吊りぎみの大きな瞳／長いまつげ／微笑。

自分達より年が上か下かは分からないが、大人の女、ついでにいうなら魔性の女を連想させる美貌の持ち主は

「昨夜は残念だったわね、惜しい所まではいつてただけだね」

赤いルージュから発せられる言葉は滑らかすぎて、一瞬、日本語ではないような気さえた。

窓の方へゆつくりとサカキが顔を上げる

「……ナイキ、何か食わせる」

その「何か食わせる」の「何か」には、ナイキ自身の事も含まれるわけだが、ナイキはそれをさらりと流した。

女好きのサカキが下世話な事を言ったとして、それは挨拶のようなもので、襲う様なマネは決してしないという事をナイキは知っている。いや、サカキと関わりのあるマチの女のほとんどが知っている事だろう。

ヒイラギは遠目に車の中を盗み見ていた。

（運転しているノッポのもじやもじや頭は別として、あのクソチビはいないらしい……）

遠目で見ているヒイラギの視線と、ナイキの黒目がちな瞳が重なった。

ヒイラギはバツが悪そうに話しかける。

「あんたら、奪い屋だろ？ あくまで物メインだと思ってたけど」  
昨夜、正に完全にしてやられたのは、このナイキ率いる三人組だった。

彼女達は奪取屋、依頼された敵対組織の情報や物（武器、麻薬、宝石、その他諸々）を奪い、盗み出すことを業としていた（ウワサによると組織が保有する装飾品やら、宝石等のドロボウ行為も私的

に行っているらしい」。

ナイキはうつとりするような微笑を浮かべたままで言った。

「私達の技術を物だけにしか使わないってのも、勿体ない話でしょう」

納得できるか、という表情を作りつつもヒイラギはナイキの瞳を真つすぐ見つめたまま、返す言葉が出てこない。すると、今にも消えいりそうな蚊細い声で、サカキが尋ねた。

「……で、昨夜のあの男どうしたんだ？」

ナイキはそこで再び微笑をサカキに向けた。

「追っ手の連中の二倍金を払うっていうから、逃がしちゃった」  
舌をペロリと出してイタズラそうに笑う。

「逃がし屋もやんのかよ」

呆れぎみにサカキが呟く。

「まあ、何はともあれ、手強い商売敵登場だから、あんた達もがんばってね」

ナイキが手を振る。それを合図にもじやもじや頭がアクセルを踏み込む。

「おい！ 食いもの！！」

サカキが振り絞ってあげた声は、ライトバンの排気音にあえなくき消された。

2

タバコ屋に着くとサカキは、なけなしの四百二十円でいつものメンソールを購入した。そして、それが現状でのサカキの全財産となった。

どうせなら食いものを買えば良いのに、とヒイラギが口を尖らせると

「ポリシーを守れないならそんな男とは呼べない」

サカキはたしなみというヤツについていつもどおり語ったが、そこ



にはいつもの饒舌ぶりは無かった。

身を切るような冬の風から、タバコとマッチの火種を守る為にコート襟を立てる。そっとタバコに火を点け、煙を体内にとりこむと、渴いた身体と乾燥した空気のせいで思いのほかサカキはむせた。咳きこむ度、量の瞼に涙が滲んでいく。

ようやく落ち着きを取り戻したサカキが、搾り出す様に呟いた言葉は

「……なんだかなあ」

だけだった。

その有様は自分達の中途半端な人生の末路を見るようで、ヒイラギはサカキの顔をしみじみと見つめてしまった。

……「死」というものは案外近くに在るものなのかもしれない。内なる自分とも誰ともつかない声が、ヒイラギの頭の奥の方に浮かんで消えた。しかし次の瞬間、更に頭の奥の方から「ヒュン」という風を切る音が聞こえた。

と、同時に身を屈めたヒイラギの頭の上を黒い影が通り過ぎる。

ヒイラギがしゃがんだままの体勢から足元に隠していたナイフを抜いたが、その刃先をブーツの踵が踏みつけた。

ほぼ同時に銃を抜いたサカキも、ブーツの男の右手に銃身をしっかりと握られ動きを封じられる。

数瞬前にヒイラギの頭上を通り過ぎた、ゆっくりとサカキの喉元へと押しつけられた、男の得物が映る。その正体。

金色の骨の龍が装飾された長棒<sup>コシ</sup>棍。

「お前ら、修行が足りんなあ」

男はそう言うのとカッカッカッと笑った。

しゃがんだままのヒイラギは見上げるが、長髪の奥に見えるのは、これまたウザったい程の無精ヒゲと左目だけだった。しかし、左目には眼帯がしてあったので表情までは分からない。ただ眼帯にLOVE&PEACEと書かれているのはしっかりと見えた。

サカキが溜息まじりに声を上げる

「勘弁して下さいよ、スバルさん」

スバルと呼ばれた男が二人を解放すると、ヒイラギはしゃがんだ時に膝に付いた土を払いながら立ち上がった。

今年は暖冬らしく、十二月も半ば過ぎだというのに雪が降っていないかったのは幸だ。

3

スバルという男 粗野な風貌／漆黒の長髪／覗いた左目の眼帯／残された右目 数少ない者にのみ与えられた全てを達観するような瞳 切れ者の印象／若くして組織の？ 3にまで登りつめた黒の<sup>ネロ</sup>カリスマ 通称？塵の王？<sup>ロード・オブ・ダスト</sup>

サカキとヒイラギより四歳年長のスバルは二ツト地のセーターに細身のパンツ、そして毛皮のコートを羽織っていた。毛皮のコート以外は全身黒づくめという姿だったが、長髪と無精ヒゲを加味しても小綺麗に見える。同じネロの幹部でもクロツチとは偉い違いだ。

とはいえ、外見上をクロツチと比較するから余計にそう見えるだけで、実際の所、このマチで？<sup>ゲームメイカー</sup>盤上の支配者？と呼ばれるクロツチ以上に頭の切れる男もそうはいない。

サカキが情けない顔を浮かべている事に気づいたスバルに、ヒイラギが事の成り行きを伝えると「お前らしい」と言っ、スバルは再びカッカカッと笑った。

「お前からこのままじゃ怪奇ジャガイモ男になっちまうな」  
スバルがからかうとサカキが最後の意地を張る。

「何かを成す為には恥を忍んでも生きねばならない、つてのが武士道でしょうが」

「じゃあ、ジャガイモ侍だ」

スバルの止まらない笑いを尻目にヒイラギが、成した事も、まし

てや侍でもないだろお前は、と内心毒づいていると、それなら飯を食わせてやるから簡単な仕事を引き受けるという話になり、サカキは一も二もなく引き受けた。

サカキとヒイラギが連れていかれた「アタゴ食堂」は、町側にあるがマチ側からもそう遠くない事もあり、マチの人間が食べに行く事も少なくない。

人の良さそうな夫婦が切り盛りする食堂は、安くて美味しい上にボリュームもあるので、若い客層には特に人気がある。町とマチの人間が同席することがあっても、何の揉め事もないのは夫婦の腕と人徳たればこそであろう。

今回もボリューム満点、ご飯大盛りのオムレツ定食とギョーザ定食をサカキとヒイラギは堪能した。

なぜかヒイラギの頼んだギョーザ定食にはミニサイズのオムレツがサイドメニューでついてきて、サカキは最初こそくだをまいていたが、肉野菜炒めのたっぷりつまったオムレツを頼張るなり「一週間ぶりのまともな飯だ」と言っただけ涙を流さんばかりに感動していた。その姿を見ていたスバルは、もういい加減、組織に入れと誘ってくれたが、この後に及んでサカキは断った。

武士道とは死ぬ事とみつけた。とは言いが、のたれ死ぬ事じゃあないだろうに……。

4

いつ来ても落ちつかない所だ。内心ヒイラギはそう思いながらも、ついキョロキョロと周りを窺ってしまう。

元はホテルのチャペルだったという建物に、家三軒を繋げて造り直した和風だか洋風だかよく分からない家屋を分厚い屏が取り囲んでいた。

組織ネロファミリー本部。

このマチの悪党供の総見本市みたいな所だ。

前に来たのは、春先だったから、もう九ヶ月も前の話だ。

応接間の革張りのソファにスバルと向かい合い、出された少し煮つまり気味のコーヒーなんて飲んでいると奥の部屋から二人の男が現れた。

一人はそのままドアの脇の壁で立ち止まったが、もう一人のひょろりと背の高い、それでいながらそれに見合った肉の付き方をしていない少し痩せ気味の男は、そのままソファまで歩くとスバルの隣にどっかりと腰を下ろすと

「なに？ お前らついにウチに入る事にしたのか？」

目を細め、元々大きな薄い口を引き裂いたかの様に耳元まで引き上げて、人を馬鹿にするような嫌な笑いを浮かべた。

「いや、そうじゃないんだ。ジン、お前これからエンシノさんの所に行くんだろ？」

スバルが間に入る。

ジンと呼ばれたその男 再びの嫌な笑い／銀髪のみディラムシ

ヨート／長身痩躯の頼りない体躯 ハードラック・ベイン 裏腹に、組織きつての武闘派

／組織ネロ？ 5 通称？凶刃？

「ああ、そうだ。あのババア、密航者の受け入れに『難色を示しやがって』ってやつだぜ？ 早い話がウチからもつと絞り出す気でいやがんのよ。とはいえ、ランニャテラ<sup>ランニャテラ</sup>の来年からの目玉だからよ。時間もねえし気にもいらねえが、仕方がねえ。あのババアのお気に召すままにってわけよ」

ドアの脇で立つ男に視線を送ると、男は手にもった銀色のアタッシュケースを軽く持ち上げてみせた。

組織の経営する、売春宿「蜘蛛の巣」<sup>ランニャテラ</sup>の運営は組織にとっても、

そしてジン自身にとっても重要な資金源なので力の入れ具合も違うらしい。いつもなら、揉めるならことんまで、を信条にしているジンが、手っ取り早く金で解決しようとしているのがその証拠だろ

う。

ジンの用件を確認した後でスバルが続けた。

「そのついでと言ったらなんだが、こいつらに今月の倉庫の代金払ってきてもらおうと思ってな」

ジンが困惑した表情を浮かべる。

「そんなもんついでにオレが払ってきてやるよ」

スバルが小さく笑う。

「抑制剤だよ。抑制剤。さすがにお前でもトライデント相手にケンカ吹っかけたりしないとは思っけだな……」

視線をサカキとヒイラギの方に戻す。

「……そんな時はお前ら、こいつ殺しちゃっていいから」

スバルの小さな笑いは完全な爆笑へと変わっていた。

「言ってる」

ジンが苦笑いを浮かべた。

爆笑するスバルを眺めながら、ヒイラギは「サカキは笑えないだろな」と内心で思っていた。

以前、ジンについてサカキが話していたことがある。

「世間じゃ戦闘狂なんて言われてるけど、オレに言わせりゃただの勝利狂だよ、あれは」

サカキの男のたしなみによれば、勝つまでやるというジンの行為は潔さに欠けるという事なのだろう。そんなわけで、ジンはサカキにとってマチの中で苦手な人間の一人だった。

ちらりと隣を見るといつもの表情ながら、やはりサカキには抵抗があるらしいのをヒイラギは長年の付き合いで何となく感じた。

5

トライデントの本拠地たる港までは、ジンの用意した車で行く事

になった。

車塗りのベンツを見た時、サカキが「あからさま」と小声で言つて小さく笑つた。

間もなくして現れた、精悍さが滲む面構えの男　サイドを刈り上げたオールバック風／容貌に見劣りしない堂々とした体躯／イーグル・アイ啞えた手製の紙巻タバコ　組織ネロ、ジン派の？2？驚の目？ことへイズが早々と助手席へと乗り込む。その手には取引用とは別に、彼愛用の黒いアタッシュケースが握られている。

その後で、さつきまで金の詰まつた銀色のアタッシュケースを後生大事に持つていた男が運転席へと乗りこんでいく。自分の目前を横切る間際「いよお久しぶり、テツちゃん」とサカキが声を掛けると、あからさまに嫌な顔をして舌打ちを返された。

テツという男　黒髪のベリーショート／離れぎみの黒目／何かと小知恵の働くジン派の？3。

サカキがヒイラギにだけ聞こえるよう小声で呟く。

「ここまでアケスケに嫌われると、逆に清々しいな」

テツはサカキ達と同期にあたる。頭の回転が売りの彼ではあるが、今の地位に至るまでに四年という月日を要しているわけで、組織に入れば即幹部などと噂されているサカキとヒイラギを良く思っていないのは当然であろう。

スバルより二つ年長のジンが、自身の今の位置を踏まえスバルに對しどう思っているかはよくわからない所だが、テツがサカキとヒイラギのことを疎ましく思っているのは誰の目にも明らかだった。

いつものテツの対応をやり過ごした後でサカキとヒイラギが車に乗り込もうとすると、ジンが「自分が真ん中に座るからお前らは両脇に座れ」と命令した。

車が走り出すまでは「お前らは弾よけだ」と言つて笑つていたくせに、いざ走り出すと「真ん中は乗り心地が悪い」と文句を言い出した。しかし実際には車を止めて席を変われとは言われなかったのだ、ただネチネチと文句を言いたかっただけなのかもしれない。

何にせよ、港まではものの五分でつけたわけだから、相乗りの甲斐も文句の聞き甲斐もあったというものだ。

6

トライデント  
？三叉の予？

港を拠点とする組織で、港の利用に関しての一切を取り仕切っている。

ネロファミリー同様、老舗の組織ではあるものの、格段に規模も人員も見劣りする。しかし、このマチで他の組織から一目おかれる組織であり続けられるのは、やはり港を支配しているというその特質ゆえであろう。

組織のドン・エンシノは当初、海皇ポセイドンにかけて、ドン・ポセイと名乗っていたらしいが、部下に笑われたので改名したのだそうだ。エンシノガイオス、それもまたポセイドンの別称らしい。

サカキにしてもヒラギにしてもそうだが、このマチの人間は皆偽名を使っている。基本的にマチにルールはないが、それはあくまでいくつか存在する暗黙の了解のひとつだ。

人に自分の本名を知られるなど、このマチでは命を握られる様なもののだから……。

マチ最強の五人の銃使い？<sup>ゴットハンド</sup>五本指？だの、六人の刃使い？<sup>ジンシュウリ</sup>刃修六花？<sup>ツカ</sup>だのと、やたらと異名や名前にこだわる暇人どもの巢窟たるマチである。自分で好きな名前を決められる、ということは名前の重複が当然起こることとで、その度に「名前狩り」と称される下らない決闘が行われ、血が流れるという事もざらであった。

組織の？2で倉庫街をしきっているのは、エンシノの実弟ドレーク。

そして、エンシノの手足となり、現在現場の全指揮を執るのが？

3のナギ。

組織の長三人で仕事も部下もコントロール出来る規模の組織が望ましいというのがエンシノの考えであり、そのためトライデントの側からトラブルを起こすということはまず無かった。サカキとヒイラギも一度として揉めた事はなく、エンシノの人柄も好んでいたもので、トライデントとは良好な関係を築いている。ただ一点を除いては……。

サカキもヒイラギもナギが苦手だった。年齢三十にしてすでにドンの時期後継者と有力視される彼ではあったが、非常に危険でキレた性格の持ち主であった。

以前、報酬をほんの少しだけちよるまかした取り引き相手を、とことんまで追い詰めるという執念深さ以上の暴発性を披露してみせたのは語り草。それでもエンシノは組織の事を一番に考えて行動している、と、絶大な信頼を寄せていた。

しかし、その性格ゆえに彼のまわりには悪い噂が絶えない。

かつての？3を消して今の位置を手にしたらしい、という話も彼にまつわる有名な噂だ。

トライデントかつての？3、将来を期待され？海皇の息子？<sup>ザ・レガシー</sup>と呼ばれた男。存命ならば黒の力<sup>ネロ</sup>リスマ、スバルと並び称されたであろうもう一人の雄は今から約五年前、このマチではおなじみの？不慮の事故？で命を落としたらしい……。

サカキにしてみれば、一日に二人も苦手な人間に会うという事など希なはずだが、エンシノの待つポート小屋の前で彼らを迎えてくれたのは、やはりナギその人だった。



「ドン、ネロファミリーのジンが、部下二人とドブネズミ二匹連れてやってきましたよ」

こけぎみの頬／中肉中背ながら猫背ぎみの姿勢＝一層際立たせた陰湿さ／少しだけ立てた髪の毛の元気の良さ 裏腹にどんよりと濁った一重瞼の瞳／薄い唇 鬱陶しげな声音で？三叉の矛？<sup>トライデント</sup>の？3、ナギは言った。

ナギが来客の訪問を伝えると、エンシノは両手を挙げて歓迎してくれた。

「これは珍しい客じゃないか。サカキもヒイラギも元気にしてたかい？……それはそうとなんだお前たち、とうとうネロの所に入ったのかい？」

サカキが返答するよりも早く、まるで答えなど最初から分かっていたかのよう、にエンシノが話を継いだ。

「そうか、ならウチに来ればいい、お前達なら歓迎するよ」

サカキは断りながらも、エンシノが自分達の訪問を心から喜んでくれている事に対して少し照れくさそうに笑った。

エンシノは視線をヒイラギに移すと再び微笑を浮かべた。

「そうだヒイラギ、新巻鮭があるぞ、食べるかい？」

「うそっ！！ いいの？！」

ヒイラギの目が輝く。

聞けば、町の魚市場で買ってきたという。

売り子のおばちゃんに安くしてもらったからという理由で、大量に買いこんだらしい。

華奢で小柄な身体／男勝りともいうような刈り上げのショートヘアー 白が多く混じる／初老と呼べる年齢に近づいた風貌／気品などは感じられない しかし、さばさばとした物言いと気さくな性格はマチの外でも十分に通じるようだ。

こうして見ている限りただの気のいいおばちゃんにしか見えない彼女だが、実際にはマチの顔役の一人。除け者扱いにされたジンが少しイラついた口調で話しかけると、表情を一変させた。

「お楽しみの所悪いんだけど、エンシノさんよお、当初の目的忘れてない？ 大事な取り引きの事をさあ」

ジンをはじめ、ヘイズもテツも黒のスーツに黒のネクタイと黒づくめの格好をしている。ネロファミリーの正装だ。

「で、ジン。いくら持ってきたんだい？」

ジンの目を見据えたエンシノの眼光は今までと打って変わって、驚く程に鋭い。

「あんたの提示した額、しっかりきっちり持ってきた」

ジンは小さく肩を竦めてみせた。揉める気はさらさらないという意思表示。

「だったら、それをナギが確認したらお前の仕事は終わりだよ」

さつさと出ていけと言わんばかりにジンから顔を背ける。

テツの持つ銀色のアツタシユケースを、ナギが受けとる。

エンシノがサカキ達に視線を戻すと、二人は新巻鮭の美味しい食べ方について激論を交わしている最中だった。

「お前ね、それは勿論、鮭茶漬けに決まってるだろうが」

いつものサカキの勝手な理屈が躍り出る。

「さっきまで飢え死にしそうな顔してたヤツが茶漬けすすってる場合か？」

いつものヒイラギの敗戦覚悟の指摘が返る。

それを見ていたエンシノが、意味ありげな笑みを浮かべた。

8

「このマチも少し前まではシンプルだった。報酬をちよるまかすよ  
うなヤツもいなくなつたし、無駄に取り引きをこじらせるヤツもい  
なかつたしねえ。……時代なんてものに感慨深くなつたのは、私が老  
いたってことなのかもね」

小さく独り言を呟く。

それを聞いていたジンが声をかける。

「なんだ、エンシノさん。取り引き相手と揉めてんのか？ オレが追いこみかけてやるのか？」

エンシノは、ジンに向けて冷ややかな笑いで返した。

「そんな下らない事で、お前に貸した借りを返されちゃ敵わないさ。せいぜい後で百倍くらいになってから、きつちり取り立てにいくよ」  
追いこみをかけてやるのか、などと言っていたジンは逆に追いこみをかけられて苦い顔になる。

そんなやり取りも意に介さずといった表情で、ナギは淡々と業務をこなした。

「ドン、提示した額きつちりありました」

ナギからアツタシユケースを受けとると「契約成立だ」と言つて儀礼的にエンシノは右手を差し伸べる。ジンが軽く握手を済ませると、取り引きは無事に終了した。

「必要な書類は後で届ける」という約束を取り付けると、笑顔で、とまではいかないまでも、意気揚々と退室するジンの後を追つて、サカキもヒイラギもボート小屋のドアへ向かう。

ドアをくぐりかけた所で自分達がここに来た目的を思い出したので、危うい所ではあったが、ネロファミリーからトライデントへの納金を持ち逃げするという過ちを犯さずにすんだ。

サカキが早口で説明し、ヒイラギがナギの着ている上着のポケットにスバルから預かった封筒を無理やり押しこむ。

何事もなかった様にそそくさと出て行こうとするとサカキとヒイラギの非礼ぶりに、詰め寄ろうとしたナギをエンシノが制す。

「ちゃんと受けとったとスバルに伝えておくれ、新巻鮭は後で事務所の方に持って行かせるよ」

ベントツに向かって小走りのサカキとヒイラギは、少しだけ振り返つてエンシノに手を振った。

間もなく「あからさま」なベントツは走り出したが、結局、帰りの車中も来た時と同じ席順だった。

そういえば、とサカキがジンに切り出す。

「さつきエンシノさんが言ってた借りがどうのって話はなんなんですか？」

ジンがため息をつく。

「若気の至りってヤツだぜ。昔まだオレがチンピラだった頃に、あのバアさんに命を救われた事があつただけだよ。それからというもの、何かにつけて借りの話をちらつかせんのよ。あのババアの事だから、後でどんなムチャな注文言い出すか分かったもんじゃねーっての」

肩を落とすジンを見ているサカキの口元が少し緩んでいる。

正直微妙な仕事だった。いや、仕事というよりオツカイに近い。

それでもサカキはジンとの溝がほんの少しでも埋まったのだから、多少なりとも価値があつたのかもしれない。

ヒイラギにしてみれば新巻鮭を頂けるらしいのだから、もちろん文句なしに満足のいくオツカイであった。

9

テツの運転するベンツは、サカキとヒイラギの事務所から一区画離れた十字路で停まった。

いくら自分達の帰路沿いではないとはいえ、ほんの少しの手間を惜しんで事務所まで送ってくれなかったのは、ただひとえにテツの嫌がらせであろう。

部下の気持ちを察したジンはただキヒツ キヒツと笑った。

十字路から事務所まで歩くくらいという事もなく、嫌がらせとも感じてないサカキとヒイラギは、ジンの「スバルには俺から伝えておく」という言葉を受けると素直に車を降りた。

冬の短い陽が早くも沈みかけていた。

海風も一層厳しくなり、身を切るような寒さにサカキとヒイラギは見舞われたが、それでも二人の心は充足感に溢れていた。

明日にはエンシノからの新巻鮭も届くだろうから、今夜一晚くらいジャガイモ料理が並んでもサカキも文句を言えまい。

サカキがタバコに火を点けるのを見て、ヒイラギも自身のタバコを取り出す。二人は体内にニコチンを取りこみつつ帰路を目指す。足どりは軽い。

事務所まであと十メートルといった所で、サカキがヒイラギに声を掛けた。

「……ヒイラギ」

ヒイラギはパーカーの裾で隠れていた、腰に設置してあるカバールを外し、ナイフを抜いた。足元に隠していたものより一回りは大きい。

「あいよ」

そう言っただけヒイラギはブーツの踵でタバコをもみ消したが、サカキはタバコを啜えたまま懐から銃を取り出した。

10

事務所の入り口には上部、下部が空いているスイングドアが設置してあった。西部劇の酒場の入り口でよく見かけるヤツだ。

住み始めて間もない頃、掃除も全然終らず改築作業もままならないというのに、サカキがどこからか拾ってきたそのドアを設置し、「完成だ！」と言いきったのをヒイラギは今でも憶えている。

サカキなりのこだわりだったのかもしれないが、機能的とはまるでいえなかったそのせいで季節が冬へと移ろい変わっていく中では、隙間風どころではない木枯らしに事務所内を占拠された。

勢いに乗る海風がスイングドアを軋ませる度にヒイラギは、これが冬將軍の訪れというヤツか、と思ったものだ。しかし、これが吹雪にでもなるうものなら、冬將軍大暴れ、なわけだからたまったも

のではない。冬將軍の尊大さと手強さを理解したサカキとヒイラギは、入り口の内と外にジャンク山から拾ってきた鉄板をはめ込めるように改良した。

風で鉄板がガタガタと鳴る事など、冬將軍の尊大さに比べればどうという事はない。

その外側にはめたはずの鉄板が外れていた。盗まれる物がないとはいえ、寒さ対策として昼間事務所を出る時しっかりとめてから出たのは確かだ。

ヒイラギは正面玄関と裏口から挟みうちにするかと提案したが、サカキは却下した。侵入者がいるとして自分達の家にコソコソ入る必要はない、というのである。

従って、戦略としては力押しの正面突破という事になった。サカキが銃で相手の得物を封じ、ヒイラギが突入するという強襲型フォーメーションだ。

サカキとヒイラギはそれぞれスイングドアの右側と左側に背中を預ける。

ヒイラギは全速力で突入できる体勢をとりながらその時を待つ。サカキのファーストアタックで捌き切れない程の数の侵入者が潜んでいればサカキが「待て」を掛けるだろう。

サカキは激鉄を起こすと、間髪入れずにスイングドアの上部隙間から事務所に銃口を向けた。

しかし、サカキは「待て」とも「Go」とも言う事はなく、それどころか引きがねを引く事もなかった。

サカキの横顔をしばらく眺めていたヒイラギはゆっくりとドアを開け、中を覗いた。

事務所の応接間（一応）のボロボロの緑色のソファに腰かけて、サカキとヒイラギのマグカップでドリンクをすすする若い男と女がそこにいた。

サカキの向ける銃口に動じる様子もなく若い女が口を開いた。

「良かったらコーヒーでも飲む？ インスタントだけど」  
何も楽しい事などないのに、女は口元だけニヤニヤと笑っていた。

## 花と蝶 2

1 1

女ノ小柄 男としては背の低いヒイラギより頭半分程小さいノ黒目がちで大きな瞳 好奇心の塊のような注視ノ薄唇 そこだけなぜか媚びたように緩めているノ白いセーターやらカーディガンを何枚も重ね着した上に、白いダウンジャケットを羽織った姿はともすれば雪ダルマ かしそう見えないのは着やせするタイプなのか？

服装にしてもそうだが、真ん中分けの腰まで伸ばしたストレートの髪の毛も手入れされている様子はみえず、おしゃれというには程遠い。だが、特に気になる程のものと感じられないのは、あどけない少女のような童顔のせいだろう。色白の肌と相まって、雪ダルマというより雪の精を連想させるのはそれによる所が大きいらしい。

男ノ深緑のアーミージャケットノ真深に被った黒のニット帽ノ覗く鋭い瞳は奥二重ノ左目尻の下に何かで切られたような傷痕。

男の方は背が高い。サカキよりさらに背が高かったが、サカキとてヒイラギと比べるから背が高く見えるだけで、実際には成人男子の平均身長には届いていない。だからそのスカーフェイスとて、サカキとヒイラギに比べれば背が高いというだけの極々一般的な背の高さ。

サカキとヒイラギの疑いの視線を気にも留めず、女が口火をきいた。

「私は蝶子、でこっちは二力。あなた達に仕事を頼みたいんだけど……」

独り言の様に「へえ」と呟くと、サカキは部屋の角から木製のイスを二台引っ張り出してきてソファの向かいにどっかりと腰を下ろ



した。

「どんな？」

ヒイラギもサカキに倣って、その隣の木椅子に腰を下ろす。

蝶子が口元のニヤニヤを止め、真剣な表情になる。

「実は私達トラブルに巻き込まれちゃって、なんでそうなったのかか真相を知りたいの。あなた達にはその手伝いをしてほしいの。期間は、私達が真相を……納得のいく答えにたどりつくまで。報酬は一人一日一万円、答えが分かったら、その時にはまた別に報酬を出すわ」

サカキはタバコに火を点けるとゆっくり煙を吐いた。

「そういう事ならおあつらえの男がいるよ。いつもアメ玉啜えてやる気があるんだかないんだか分からないが、謎解きに関しちゃう腕は確かだ」

サカキは仕事を断る事はあっても人に譲る事はない。サカキが東のマンシヨンの自称探偵をそこまで評価していたのか、という事にヒイラギは少し驚いたが、サカキがヒイラギの危惧している点について同じく危惧しているという事は十分に理解できた。

こいつらはマチの「外」の人間だ。

外の人間と関わって、ろくな事など一つもない。サカキが仕事を遠回しに断ったのもその理由からだろう。

しかし、蝶子は一瞬たりとも動じることなく、サカキの目を真っすぐに見据えたままで

「真相は自分達で調べたいの。人ではなく自分達で納得のいく答えを見つけない。だからこそあなた達の助けが必要な」

サカキとヒイラギの目を交互に見つめた。その瞳には決意めいたものが感じられる。

蝶子は小さく息を吐き出すと話し始めた。

「インターネットって知ってる？」

パソコンの事はヒイラギにはさっぱりだった。

ジャンク山に事務所で使えそうな物を拾いに行った時にその残骸を見た事はあったが、ちゃんとしたパソコンを使った事もなければ触った事すらなかった。

知識に関してはヒイラギと同程度のサカキではあったが、こちらは何分、好奇心の塊なので蝶子の説明に身を乗り出して聞いていたし時々質問までしていた。

蝶子の説明によるとインターネットとは人と人や情報をパソコン上で繋ぐネットワークの事らしい。匿名性が高く、気軽にネットワーク上を行き来できる反面、犯罪性も高いという事だった。

ヒイラギは仮想のネットワーク上の犯罪については、色々な事を考えるものだな、と感心はしたものの、その方法などについては全く理解できなかった。

サカキの質問で話がどんどん横にずれる為、なかなか進まない話を蝶子が軌道修正する。

「……で、そのネットワーク上で私はブログ……公開日記帳みたいなのをやってるんだけど、そこに立ち寄ってくれる人達の中で特に仲良くなった人達にだけ、裏のホームページ……隠れ家みたいなものに入れる鍵をあげてるの」

見本があると言って荷物の中からノートパソコンを取り出すと、編集途中のホームページのタイトルページを見せてくれた。そこにはナース服姿の蝶子が、巨大な注射器を抱えて立っていた。

蝶子いわく、そのブログは癒し系などと言われ結構な人気らしい。

それにしても問題はサカキだ。

蝶子の話にここまで食らいついて聞いているのを見ると、「これ

は絶対必要になるからパソコンを買わねば」とサカキが言い出すのでは、とヒイラギは内心ヒヤヒヤしていた。ヒイラギが邪魔になるからいらぬという言葉を遮ってまでジャンク山から拾ってきたアコースティックギターは、スタンドバイミーを完奏する事なく二階のサカキの部屋で埃を被っている。なぜだかイルカの何とかという代作曲は完璧だったのだが……。

ヒイラギの心配をよそに蝶子は話を続けた。

「その裏ページのタイトルはウツバスター。私達的には社会福祉の一環としての慈善事業も兼ねてただけど……。現代社会には疲れてる人がたくさんいるの。企業の鹵車として激務に次ぐ激務、身体的にも肉体的にもボロボロになっていく中で、愛する家族との間に溝が出来ていく。そんな中でも仕事を辞める事もできずに孤独の中で死を選ぶ、そんな人達が増えているの。そういう人達が少しでも自殺しなくてすむようにしたい。それがこのホームページのテーマなの」

福祉や慈善とは真逆の位置にいる人間としてヒイラギは正直な所、上の空で聞いていた。サカキにしても先程までの熱は冷めたようだ。「だから、そういう人達がゆっくり入院でもして休めるように……」そんな事に蝶子は気づく気配もない。そして続けた。

「……私と二力で通り魔的犯行をする事にしたの」

13

二カと呼ばれたニット帽を被ったスカーフフェイスはまだ一言も発していなかった。

ヒイラギの真向かいに座っているから、顔だけはヒイラギの真正面を見据えてはいたが、視線はヒイラギとの間にある空間を見つめるようなぼんやりとした表情である。

サカキとヒイラギと会ってから今までずっとそんな調子だった。意識だけ別の所にある、そんな表情。しかしサカキとヒイラギも今、まさにそんな表情をしていた。

それに気づく様子もなく喋り続ける蝶子をヒイラギが制した。

「ちよつと待てオジヨーチャン、今、なんつった!？」

蝶子は説明不足でゴメン、と言わんばかりの愛くるしい照れ笑いを浮かべた。

「通り魔的犯行って言っても、それは演出なの。ウツバスターを訪ねて来てくれた人達の中から特に疲れてる人、そして信用のおける人を厳選して通り魔にみせかけてボコボコにして、全治一ヶ月程度のケガを負わせるの。報酬は五万円。あらかじめ用意してもらっておいてボコボコにした際に財布から抜き取るの。どこからどう見ても金銭目的の通り魔の犯行にしか見えないでしょ」

やはりマチの外の人間なんかと関わるべきじゃなかった。

ヒイラギの嘆息。

先程から蝶子が得意気になって話す計画は穴だらけのものだった。童顔のせいで年齢もよく分からない蝶子だったが、実際は予想以上に幼いのもかもしれない。

「でも、土壇場になって怖いから辞めるって人の為に一回だけ電話していいルールになってるし、約束の時間に現れないって事も結構あるのよね。一回五万円じゃ元も取れないから、ホント慈善事業ね」

蝶子は無邪気に笑ったが、サカキはクスリともしなかった。

「で、トラブルってのは結局なんなんだ？」

サカキの射るような視線が蝶子の顔から笑みを消した。

「……実は、今朝死体がみつかったの……その人は昨夜二力が襲った人なの」

ヒイラギ、再びの嘆息。

厄介事をマチの外から中へ持ち込んでしまった。こんな事マチの

人間に知れたらどうなるか分かったものじゃない。

サカキが冷たく言い放った。

「オレ達は弁護士でもなけりゃ、偽造パスポートを作る人間でもない。助けてはやれないよ」

沈黙。サカキも、当然ヒイラギも、そして繋ぐ言葉を紡げない蝶子も。辺りを思い出したように十二月の痛々しい寒さが覆っていく。その時。

「オレは殺しちゃいけないよ」

しばしの沈黙を破るように、静かな、それでいて力強い言葉が響いた。

それが二力の初めて発した言葉だった。

14

あまりに唐突だったのでヒイラギは「ああ、こいつはちゃんと喋る事ができるのだな」などとボンヤリと考えてしまった。表情こそ真摯に二力の方へと向き直ったサカキの内心とて、同じようなものだろう。

「確かにその渡辺ってオッサンをボコボコにしたのはオレだけど、殺すまではやってないよ……二年もこんな仕事を続けてるんだ。さすがに加減くらいは知ってるよ」

せつかくの二力の発言ではあったが、ヒイラギは天井のシミを見つめながら呆れ声で呟く。

「信ずるべくは職人芸の賜物のみってわけだ」

場が再びひんやりと静まりゆくのを嫌うように、蝶子が張り切って声を上げた。

「そうだ、今朝のニュースで言ってたけど、その渡辺って人の致命傷は、頭部を打った事による出血死だったって。二力は頭なんて殴らないもんね」

必死の助け舟が、何の助けにもならない事を蝶子以外の三人は理

解していた。

場の空気が冷たくなっていくのを肌で感じてか、蝶子はもはや泣きそうだった。

「骨折程度のケガをさせるのが目的だから頭は殴らないって事は分かったよ。だけど手元が狂わなかったって絶対言い切れるか？ 例えば仮にボコボコにされた後、しばらくそのおっさんが生きていたとしても、その後おっさんが転んで頭をぶつけて死んだとしたらそれは関係ない事だと言えるか？」

矢継ぎ早にヒイラギが質問を口にした。屁理屈の申し子のサカキ相手になければヒイラギの追及も中々のものである。

二力はだんまりを決めこみ、蝶子はとうとうえづき始めた。

どういう状況であれ、空気を悪くした当時者として少しだけ居たためれずに頭の後で手を組むと、ヒイラギは再び天井のシミに視線を逃がした。

ヒイラギと二人のやり取りを静観していたサカキが重い口を開く。「調べた結果、真実がおまえ達にとって都合の悪いものだとしたらその時はどうするつもりだ？」

「その時は……」

発言しようとした二力を蝶子が制した。

「その時は、私と二力でどうするか決めるわ。あなた達にお願いするのは、あくまでもそれを知る為の手伝いよ……でも、どういう形であれ責任は取るわ」

涙と鼻水で顔はぐしゃぐしゃだったが、瞳には先程同様の力強さがあった。

サカキがちらりとヒイラギと目を合わせる。

そうだよ、女の涙にや折れてやるのも、ここでやらねばつても男のたしなないだよ。でもこういう嫌なことを俺に言わせるってのはどうかと思うけど。

内心毒づきながらヒイラギは天井のシミから、再び蝶子達へ視線を戻す。

「今、言った事忘れんじゃねーぞ」

厄介事には違いないが、こんな不景気だ、仕事があるだけマシとしよう。ヒイラギの頭の後ろで組まれた両手が膝を叩くのと同時にサカキが結論を伝えた。

「分かった。引き受けよう」

15

話し合いも終わる頃には、冬の闇が辺りをすっぱりと包んでいた。ヒイラギ手製のジャガイモのフルコースを皆で食べると、今日はさつさと休んで明日の朝から動こうとサカキが提案した。しかし実際の所、朝になれば寒いからまだ起きたくない、イタズラに時間を浪費するのも、またサカキその人であるうが……。

サカキが最後に「どうして、俺達に依頼する事にしたのか」と質問すると、蝶子が口元だけニヤニヤとさせて答えた。

「マチに入っただけに聞いて歩いたの。このマチで明らかに面倒事だと分かっている、引き受けてくれる人は誰かって。尋ねた三人全員が『そんな物好きはサカキとヒイラギくらいものだ』って」

見ている人間は見ているものだ、ヒイラギは自虐的に笑ってみせた。

サカキの部屋よりはまだマシという理由で、ヒイラギの生活感のない部屋は蝶子に占拠された。さつきまでが嘘の様に鼻歌まじりでベットメイクする姿を見せられては、正直、良いように丸め込まれた気さえしてくる。

一階のソファは二カにあてがったのでヒイラギは、随分久しぶりにサカキの部屋で枕を並べるようになった。とはいえ、ベッドを譲っては貰えなかったため、ヒイラギはサカキの拾ってきた「モノ」達の隙間に寝袋を敷いた。

乱雑なモノ達の中でも、特にアコースティックギターの不要さうげんに改めて苦々しさを感じているヒイラギの気持ちなどお構いな

しに、サカキは修学旅行気どりでどうでもいい話を喋り始める。

お前、早起きするつもりさらさらねーだろ。

諦めにも似た感情で寝袋から上半身を起こしタバコに火を点けたヒイラギを見て、お前話が分かるねと言わんばかりにベッドから身を乗り出すとサカキもまたタバコに火を点けた。サカキの目は爛々と輝いている。

ヒイラギが溜息と一緒に煙を吐き出す。

こりゃあ、確実に寝ぼうだな……。

16

午前十時。

朝というにはあまりに遅い時間に一向は事務所を後にした。何から調べるにしろ足が必要、ということで車を調達するためだ。

マチの角には自動車整備の工場があり、修理の他に自動車の販売とレンタルも行っている。

工場に着くと、ダイマルという禿頭で前歯が一本もないおっさんが「これは珍しい客だ」と言ってヘラヘラと迎えてくれた。

工場は一見して動きそうもないものから、ピカピカの新車まで結構な品揃えだった。

その中からサカキと蝶子は青いスポーツカーをひどく気に入った様子だった。インプレッサという名のスポーツカーにしよう。なぜなら綺麗だからとか、速そうだからとか言って二人で盛りあがっている。サカキも元来、変な所で子供っぽい所があるから、蝶子とは以外と嗜好が合うらしい。

ヒイラギが目立つからやめようと声をかける。

こんな狭い車には乗りたくないというのが本心ではあるが、それは敢えて言わなかった。

ヒイラギの反論も物欲の虜たる二人には届きそうもない。すると、



それまで会話に交わる事もなく車を見ていた二力が、突然声を発した。

「ヒイラギの言うとおりだ、これはやめた方が良い」

会ってそれ程間もないのに慣れ慣れしく呼び捨てにされて多少の不満はあったものの、自分の意見に同調してくれる人間の存在にヒイラギも悪い気はしない。

二力がインプレッサの助手席のドアを開けて中を指さす。

「これは二台の車の前と後ろをくつつけたものだ。普通に走るかもしれないが不良品である事には変わらないよ」

二力の指さした先を見ても接着された痕跡など全く分からなかったが、ダイマルの顔に多量の油汗が滲んでいるのを見る限り、どうやら本当らしい。

サカキと蝶子に任せていると騙されるのが関の山、結局二力が選ぶ事になった。しかし、数ある中から選ばれたのはワゴンタイプの白い軽自動車だったので、サカキも蝶子も不満顔だ。

数年前に爆発的にヒットとなったその軽自動車は、二力によるとこの中で一番状態が良く手入れもされているらしい。

レンタル料金としては法外な値段をふっかけられる羽目になったが、ダイマルいわく無免許の人間に貸すのだからそれくらいは当たり前との事。正論を掲げられては渋々従う他はない。それでもインプレッサの口止め料という事で、多少の割り引きはしてくれるらしい。

帰り際に、やけに車に詳しい二力にダイマルが仕事の勧誘をしていたが、二力は無言で断っていた。

17

「あいつら、ちゃんと良い子で留守番してるといいな」

サカキは軽口を叩きながら、運転席のドアを開ける。

蝶子はさっきまで真剣に読みあさっていたタウン情報詩を、車が

ら降りながら助手席に置いた。

「お土産、何にしようかな。迷うなあ」

サカキと蝶子はマチから海岸線を南下しM県のK市にいた。I県との県境に接するその町は、二カに襲われた渡辺という男の死体が発見された町だ。

車をレンタルした後、とりあえず現場を見ておこうという流れになったものの、さすがに当時者の二カを連れていくわけにはいくまい、とはいえ二カ一人残すのは心許ないという理由でヒイラギも事務所に残った。……そういえば聞こえが良いが、実際はほとんど蝶子が一人で段取り、不満を露にするヒイラギを尻目にサカキの運転でそそくさと出発したのだが。

そんなわけでサカキと蝶子は、この地方都市にしては割合栄えている感のある町にいた。サカキの安全運転にも関わらず、マチから100km以上離れた現地に二時間で到着できたのは奇跡に近かった。

犯行現場から少し離れた有料駐車場に車を停め、路地裏へと歩いていく。

犯行現場に近づくに連れ、通行止めの看板と警官の姿が目につくようになった。

犯行現場も目と鼻の先という所で、サカキと蝶子は別の路地へ入る狭い道を右折した。さすがにこれ以上は近づけまい、仮に現場に辿り着けたとして、とりあえず現場を見たいという衝動のみで動いている蝶子がそこから何かを読みとる事など無理だろう。サカキに至ってははつきりとした、それこそダイイングメッセージの様なものでも無い限り詮索する気すら起きないだろう。人を相手にするとなれば別だが、サカキの目に何も映らなければ、それはサカキにとって何もないものと同義だからである。

「それはサカキが何も見ようとしなからだよ」

以前ヒイラギに言われたことがある。現にヒイラギはその能力に長けていた。

普段は方向オンチのくせに、自分達が追っている人間が右に行つたか、左に行つたかをその場の状況だけで瞬時に見極める事など、とてもサカキには真似できない。

負けず嫌いのサカキは、

「それは見える、見えないじゃなくて嗅覚が優れてると言うのだよ」  
自分が花粉症だからそう上手くいかないのだという言い方をしてみ  
たが、何の言い訳にもならなかった。

実際に犯行現場を見れなくとも何かしらの発見はあつたかもしれ  
ない。やはりヒイラギを連れてくるべきだつたか……。

半ば強引な蝶子の段取りに乗つかる形になつたサカキだが、それ  
に気づかないわけではなかった。蝶子の意図、その真意がどこにあ  
るのかは分からずとも、どうしても蝶子に一つ聞いておきたい事が  
あつた。だから敢えて蝶子の段取りに乗つたのはサカキの意図  
である。

考え事をしながら、犯行現場を外れた路地裏を奥へ、奥へと進ん  
でいくと袋小路で行き止まった。

その袋小路の一番奥にぼんやりと浮かぶシルエットがあつた。

それは最初、サカキの目にはマネキンに見えた。

全裸の男性像が身動き一つせず立っている。

しかし、歩みを止めず奥へ進むうちに気がついた。

それは生きていた。

18

スラリとした長身は無駄なぜい肉など付いておらず、引き締まっ  
て見えた。

一系纏わぬ姿だつたが、また年端もいかぬ少年のあどけなさに文

学青年の思慮深さを連想させる瞳のその男は、細いフレームのメガネだけをかけていた。

事態の把握もできないまま、サカキが「何をしてんだ？」と訪ねると男は「ジイ」と答えた。

その声はあまりにもしゃがれていたもので、実際は自分が思う以上に年をとっているのかもしれない。全裸でいると若く見えるものなのかもしれないな、などと多少脳内が現実逃避気味だったせいもあって、男の答えた「ジイ」が「自慰」である事、つまりはマスターベーションのことである事に行きつくまで、不要な質問を幾つかする羽目になった。

何はともあれ、サカキの人生においてオナニーを漢字で表現する人間に会ったのは初めての事だったので、これは帰ってヒイラギに自満せねばと一人得した気分になっていた。ちらりと隣を見ると蝶子は口元を両手で押さえながら「ヘンタイだ……ヘンタイだわ」と小声で一人事を呟いている。顔を真っ赤にしながらも、それでも両目はしっかりと見開かれている辺り、好奇心の表れを感じさせる。

「どうしてまたこんな所で？」

平静を装ったトーンでサカキが訪ねる。

「何の事はないよ。ただの趣味さ。人が死んだ場所で、その人が死ぬ様を自身に重ね合わせながらするのが好きなだけだよ」

ご飯に卵をかけて食べるのが好きだよ、とでもいう軽いノリで彼はそう答えた。

彼は別に困惑する様な素振りを見せる事はなかった。現にサカキと蝶子と出会ってから今まで、彼はソレを隠すような事はなかったし、彼のソレもまた決して臆することなく、堂々と誇らしげにそそり立ったままだった。

サカキは、自らのピントからそれを外すよう心掛けながら話を続ける。

「じゃあ、残念だったな。完全に現場は封鎖されては入れそうもないもんな」

彼の表情が一瞬だけ曇る。

「ああ、そうなんだ。時間が経てば経つ程鮮度が悪くなるから、本当はあそこのベストポイントでしかかったんだが、入れそうもないから今日は見ただけにしたよ」

現場を見たという言葉に蝶子が目の色を変えた。

「あの！ 何か変わった所はなかったですか？」

彼は特に考えるでもない。

「別に。ごくごく普通の殺害現場だったよ」

蝶子がさらに身を乗り出す。

「殺害、ですか？ 警察では致命傷に関しては調査中だつて聞きましたけど、何か分かったんですか？……あの、私達はM大の法学部の学生なんですけど、色々な事件の検分をする様について……教授から宿題出されてて……」

凜とした表情ではあったが、蝶子の顔は耳まで真っ赤だし、ついた嘘の方も自信の無さからか尻すばみになっていった。

蝶子の嘘にどの程度の効果があったかは分からないが、彼は話し始めた。

「被害者は誰かに身体を数ヶ所殴られて気を失った。それからしばらくして、ヨロヨロと歩き始めた所で石のような物で殴られて絶命した。前者と後者は別人だろう」

蝶子とサカキは呆気にとられる。

「どうして、そんな事……」

彼は不思議でもなんでもないという表情のままだ。

「こういう現場に足を運んでいると分かるようになるものだよ。男が足を引きずった跡だとか、壁に手をついた跡だとか……そもそも身体を殴られた後で慎重に歩く男が、滑って転んで頭部を打つなんてナンセンスだ。しかし、今僕が言った事が何の証拠にもならないというのも、確かだがね」

彼の言う通り、それが結局は彼の想像の域を超えていないのは確かだろう。

それでも蝶子にしてみれば、それが一つの自信に繋がった事もまた確かだった。

やっぱり二力は殺してはいない　と。

19

まだ夕方には早いというのに、冬の一日が早くも、白々しい夜を伴ってすぐそこまで近づいていた。

今日は暖かな日和で、つい先刻までは厳しい寒さを和らげてくれるような優しい陽が射していたものだったが、この三十分程でその興も冷めてしまった。

これを空にしたら鉄板を閉めなきゃいけないだろう。ヒイラギが残りかけのマッシュポテトを口に放り入れる。

「あいつら、今どの辺りにいるんだろうな？　ひょっとしてまだK市にすら着いてなかったりして」

マッシュポテトのせいで良く聞き取れないヒイラギの声は、事務所の冷えびえとした空気に吸いこまれて消えた。

昨日からの同居人からは当たり前のように返事はなかった。

午後から二人して留守番という羽目になったが二力とはずっとこの調子だったので、ヒイラギは今日という日を事務所の掃除に費やす事にした。特別キレイ好きというわけではないものの、二力と二人沈黙の中にいるのが耐えられなくなったのだ。

のらりくらりと、音楽を聞いたり、埋もれていたマンガを読み返したりしたせいで掃除前と後で劇的に綺麗になったわけでもなかったが、それでもヒイラギなりに満足して仕事を終えた。自らの寢床を占領するサカキのアコースティックギターも埃を払って、風通しの良い一階の二力が座っているソファの脇に立て掛けてやった。

マッシュポテトを食べきって、空になった金製のボウルをキッチンに持っていきがてら何の気なしにヒイラギが尋ねる。

「お前さ、何で二カつていうの？ 本名じゃないだろ、それ」

ほんの少しの間の後、ソファに座る二カから以外にも返答があったものだから、尋ねたヒイラギの方が動揺してボウルを地面に落としそうになった。

「初めて会った時、特に名前はないって伝えたら蝶子がつけてくれた。蝶に花、はオプシヨンのに必須だつて理由で、に花……って事らしい。もう二年も前の話だよ」

話のついでに聞くと、蝶子が二十一歳、二カが二十五歳とのことだった。

こいつオレより年上かよと思う反面、二カが急に素直に答えるようになったのでヒイラギは少し戸惑う。それでも事件とは全く関係ないものの、こうして色々と情報を聞き出せているということに気を良くした天才尋問官気取りのヒイラギは、帰ってきたらサカキに早速自満しようと内心で一人ごちていた。

有頂天をおくびにも出さないヒイラギの尋問。技術も話術もいらない直球。

「……二年前初めてあの女と会ったって事は、それまでお前は何してたんだ？ それまでは別の名前で別の人生歩んでたって事か？」

言いにくいことなのか、二カは少し躊躇った。

少しうつむいた時に、被ったキャップの影になって一瞬ヒイラギから表情が見えなくなる。

小さく溜息をつく、表情を隠したままの二カが口を開いた。

「蝶子は良いとこのお嬢様だったらしいんだが、両親が事故死した後、親戚中が財産を横取りしようとしてるのを知って、遺産の十分の一と父親の会社の所有物だったM県S市の廃ビルだけ相続するつていうだけでさっさとその下らない争いから身を引いたつて話だ。そんなわけで蝶子は金には不自由してないから、あんた達の報酬は、心配しなくていいよ」

ヒイラギは金ボウルを両腕に抱えるという間抜けな格好のまま、二カの話の続きを待つ。

「その廃ビルに、まさか人が住んでるとは思わない間抜けな俺は身を替めようとのこのこ入っていった。俺はそこで蝶子に見つかったんだ」

間抜けな話をする二カに、間抜けな格好のヒイラギが続きを急がせる。

「で、なんで二年前のお前はそんなトコに身を替めようとしなきゃならなかったんだよ？」

一瞬の沈黙。

「……俺は」

まさにその時、事務所の木製のスイングドアを激しく叩く音が事務所中に響き渡った。

20

海岸線の道路に雪は積もってはいなかったが、もう少し薄暗くなってくれば路面は凍結を始めるだろう。

陽は傾き初めてはいたが、その分を差し引いてもサカキの安全運転は快調にして、北上を続けていた。

帰りの車中、蝶子は（彼女なりの）収穫の大きさに満足して、先程購入したお土産の入った袋を両腕に抱えて口元だけニヤニヤさせる例の気味の悪い微笑を絶やさなかった。

お茶屋の銘菓だというそれは、大福生地に冷凍された抹茶やらのクリームが入っているらしく、半解凍で食べると美味いらしい。

自分は別に土産を購入したサカキの、「この寒い時期にそんなもの」という制止も有頂天の蝶子の耳には入らず、不要にも二箱も購入していた。

事件の概要を順序だてて整理してみようかとも思ったが、今の蝶子相手ではまともな討論も出来そうもないのでそれは早々に諦め、サカキは昨日からずっと気になっていた質問を蝶子にぶつけてみる事にした。



「お前さ、昨日言ってたろ。こんな面倒事引き受けるのは俺達くらいだつて、マチの連中が言ってたつて……あれ本当のところはどういう事だ？」

蝶子は質問の意味がよく分からないという風に大きな瞳をぱちくりとしばたいた。

「本当のつて……昨日言つた通りよ。マチ行く人達に声をかけて聞いていったの。三人聞いて三人とも、そんな事引き受けるのはサカキとヒイラギくらいのものだつて」

サカキは運転を続けたまま、正面だけを見ている。

「三人？ そりゃおかしい話だ。マチのチンピラどもがそんなお人好しなマネをするとは思えないね、それもお前のような一見してマチの外から来た人間相手に。そもそもお前らみたいのがマチの中をうろつくなんて本来なら危ない橋を渡るようなもんだぜ？」

ああ、そうだった。と言つて手をポンと叩く。あまりにもわざとらしい蝶子のジェスチャー。泳ぎまくる視線のまま、おかしい声音で言つた。

「思い出した。そうなのよ、一度なんか拉致られそうになつちゃつてさ。あの時は、危なかつたなあ」

依然サカキは蝶子に視線を合わすこともなく、正面を見据えたまま。本当の事をいえば、余所見をする余裕が全くなかつただけの話だが、それでもその行為に効果はあつたらしく、蝶子は動揺していた。良くも悪くも蝶子はすぐ顔に出る。

「そうか。……つて事はそんな危機的状况を乗りこえられる様に二力は腕が立つつて事だ。だったらオレ達の助けなんて必要ないよな」  
確信的なサカキの言。

だが……。

動揺していたはずの蝶子は小さく息を吐く。その一瞬で痙攣じみた拳動不振が止まった。

「やっぱりステキね、あなた」

車が一瞬対向車線をはみ出しそうになる。

蝶子がサカキにうつとりとした眼差しを向けていた。

「二力にも言われてたんだ。本当の事を言うなら、まずサカキだ、  
って。でも、今ので確信したわ。まずあなたには話しておかなきゃ  
って」

確信を得たのは蝶子の方だった。

サカキは蝶子に質問する為に、わがままに付き合っていたつもり  
だった。しかし、この人選は蝶子なりに意図があつてのものだった  
らしい。

「二力はあなた達の事、以前から知つてたの。だから二力が言つた  
の。『こんな面倒事引き受けるのはサカキとヒイラギくらいのもの  
だ』って」

一瞬の沈黙。

柔らかく無邪気な響き　蝶子の声。

「二力は、二年前まであのマチにいたの」

21

事務所を揺るがす勢いで叩き鳴らされたスイングドアだったが、  
おずおずと開かれた後に入ってきたのは、ヒイラギから見れば貧相  
な二人組の男だった。

男の一人はヒイラギよりも年長なのは一目見て分かったが、その  
恰幅の良さも脂肪の塊にしか見えなかったし、威厳を演出している  
のか蓄えた口ヒゲも似合つてはいなかった。もう一人の若い男はバ  
ンダナを巻き、目だけはギラギラと野心に満ちてはいたが、確実に  
何か物足りない感じがするのは否めない。

こいつらは、二人足したとしても、何年たったとしても大物  
には成れないだろうなあ。

ヒイラギの感じるそれは、体格ではなく風格の貧相さだった。

「おう、ヒイラギ」

口ヒゲの年長者が偉そうに声をかける。別に見知った顔ではなかったが、ヒイラギと自分の名前を呼ぶ以上、一応知り合いなのだろうという事で「どうも」とヒイラギは曖昧な返事で答える。

どこかど事務所に入ってきた口ヒゲの男は、椅子に腰かけるとテーブルの上に足を投げ出す。ソファに座る二方とは斜め向かいだ。「ったく、なんでこのキバザメ様が、くだらねえ新巻鮭なんぞの配達なんかしなきゃならねーんだ？」

そこでようやく、この見知らぬ二人組の見当がヒイラギについた。

こいつら、トライデントか。

「キバ兄、それを言うならこのトバリだっにいて同じ気持ちですぜ」

バンダナの若い男が兄貴分の口ヒゲに便乗する。

トバリと名乗った若い男は、そのままヒイラギの前まで歩み出ると紙袋を差し出した。

「ドンから約束の品じゃ。新巻鮭といくらのしょうゆ漬けじゃから心して味わえよ」

新巻鮭どころか、いくらまで貰えると知ってヒイラギは喜びのあまり、金ボウルを地面に落とし紙袋を受けとりながら三下相手に「ありがとうございます」と敬語で礼を言ってしまう、誇らしげなトバリの顔を見て早速後悔した。

「しかし、何もない事務所だな。サカキのヤツあ今日はいないのか？」

椅子に腰かけてテーブルの上に足を投げたまま、偉そうにふんぞり返るキバザメが聞いてきた。

ヒイラギがサカキの不在を告げるとキバザメは「ふーん」と氣のない返事のまま、向かいに座る見知らぬ男を見つめた。

「で、こいつは？」

ヒイラギは、ただの客だよと短く言うとその以上は答えなかった。マチの外の人間の事をあれこれと詮索されるわけには行かない、その理由に尽きる。

それでもキバザメは自らの強面を自満したいのか「にいちちゃん、こっち向きな」と言つては、睨みをきかすのを怠らない。

ニカは視線から逃れるようにキャップを深く被りうつむいている。素人をいびつて何が楽しいんだよ、というヒイラギの思いをよそにキバザメの強面には一層力が入る。ついには立ち上がり、ニカの胸ぐらをつかむと顔を真近に引きよせた。

瞬間、魔法が解けたかのようにキバザメの強面は消え失せ、両の目を大きく見開くと、口をパクパクと開けたり閉めたりした。その姿はまるでサメというより、餌をまつコイの姿そのものだった。

「お……お前、オルカ？」

腹の底から何とか声を絞り出したコイの顔面めがけて、ニカがアコースティックギターをフルスイングする。

ヒイラギは全く事体の把握が出来なかったが、とりあえず今までのアコースティックギターへの想いをこめて「よしっ」と呟いた。

「何しとんじゃ、わりやあ!!」

トバリがさっそうと銃を抜いたが、即座に放った三発の弾丸は三発ともが全くもって見当外れの方に飛んでいった。

トバリが四発目の弾丸を放つ前に銃を持つ右手を、ヒイラギがベルトのバックルから抜いたダガーナイフで撃ち抜いた。

「バカ、どうすんだよコレ!! 掃除したんだぞ!!」

ヒイラギの嘆きも空しく部屋の壁には綺麗に穴が三つ開いていたし、そのうちの一発が壁にめり込む直前に砕いた一度も活けられる事のなかった花ビンの欠片が床に散乱している。

床につつぷしたキバザメが呻くように叫んだ。

「ナギさんに伝える!! オルカがマチに戻ってきやがった!!」

ニカの振るった二撃目で完全にキバザメは意識を失った。

トバリは右手にダガーナイフを刺したまま、一目散に走り出す。

「返せ、バカ!!」

ヒイラギが追いかけようとする頃にはトバリはすでに事務所の外。逃げ足だけは大したもんだ。

小さく溜息をつく、昏倒するキバザメを一瞥してヒイラギはズボンのポケットから出したタバコに火を点ける。見るとあれだけの暴れっぷりにも関わらず、ギターは弦が一本切れただけだ。

「さて……」

仕切り直しといわんばかりにヒイラギが声をかけた瞬間、再び事務所のスイングドアが開く音がした。

手ぶらのままで身構えたヒイラギだったが、そこに立っている人影を見て構えを解いた。

何事かと険しい表情のサカキと、ぽかんとした表情の蝶子。

二人の顔を見るともなしに、ヒイラギの口から言葉がついて出た。

「早い帰りで間に合ったな……」

そして、満面の笑みが浮かんだ。

「……パーティーが始まんぜ」

### 花と蝶 3

22

海の近くで長く暮らしていると潮風のせいで肌が荒れ、皺も増え実年齢よりも老けて見える事が多々ある。チエカロツシという男もそういう類の人間だった。初めて会った五年前より白髪も増え、まだ働きざかりといった年齢だろうにそのたたずまいも手伝ってか中年期ももう終るのでは、といった様相である。

それでも彼から感じられるのは、このマチに溢れる搾取される側の人間が持つそれではなかった。

芯を見据える様な瞳も、特に手入れされてもない白髪の交じる髭もよく似合っていた。さながら、孤高の狼を連想させる。

「そいつは奢りだ」

老練で、寡黙な狼はそれだけ言うところを離れる。

サカキとヒイラギ、ニカにはジョッキのビール。そして蝶子の前にはオレンジジュースが並んでいる。

孤狼の背中へとサカキが声を掛ける。

「悪いねマスター、部屋まで使わせて貰ってんのに。恩にきるよ」

チエカロツシは後ろを振り返るでもなく小さく右手をもたげると右足を引きずりながら部屋を出ていった。

チエカロツシが店へと続くドアを開けた時、カウンターに腰掛けるカルマと目が合った。サカキは手を振ったがチエカロツシの元で働くサカキ達より七歳年上の彼は、因縁浅からぬサカキをただ睨みつけるだけだった。

ドアがゆっくりと閉まるのを見ながら、サカキがジョッキを片手に小さく「乾杯」と言うやビールを一息に飲み干した。

事務所をメチャクチャにされた後、取る物も取らずサカキが先導

して連れてきたのは、このサカキとヒイラギ行きつけのチエカロツシの経営するバー？ヴァルハラ？だった。

四人はサカキとヒイラギの事務所からも、トライデントの本拠たる港からもさして遠くないマチの東通りにあるこの安酒場の支度部屋に身を隠していた。

ヒイラギにしてみれば、事務所でトライデントを迎え撃つか一旦マチから出て態勢を立て直すかだと思っていたので、夕刻からヴァルハラでビールを飲む事になるうとは露とも思っておらず、正直拍子抜けしてしまった。

「パーティーが始まんぜ？」などと嘯いてはみたものの、サカキがそれを真に受けたわけではあるまい。

何故ここに？ というヒイラギの質問を、サカキは後で説明すると言つて遮った。

順を追つて話を整理しようと仕切り直す。

サカキが「まずは……」と言つて自分達がK市で得た情報を話し始めると、傍らの蝶子が満を持して羽織ったダウンジャケットのポケットから取り出した、少し皺くちゃになった紙切れを広げた。

それは蝶子が描いたと思われる、死体現場付近の地図だった。正直に言えば、所々何を書いているのか読めない部分も少なくはなかったが、得意気な蝶子の顔を見せられては無碍に断るわけにもいかず、それを解読しながらの説明にサカキは苦勞している。迷路のよくな地図を指で追いながら、途中サカキの指は二度、迷路に迷う。

一番の盛り上がり所であろうあの全裸のリアルオナニストの説明を、要約して、演出もせずに話さなければならぬ事を残念がりながらも、かいつまんでサカキはK市での一部始終を話した。

「でも、そんなヤツの言う事、当てになんねえだろ？」

話を聞き終えてヒイラギがケチをつける。

「そうだな」とヒイラギに同調した上でサカキは自分の考えを口にした。

「でも、あの状況で頭部を打って死んじまうって事がありえないっ

てのは、確かに理に適ってるようにも思える」

途端に蝶子の表情が明るくなる。

「俺達がK市で得た情報は今ので全部だ。それで、お前達の方はどうなってるんだ？ あの事務所の有様。床に転がってたの、あれ俺のギ……」

「そうなんだよ！ 聞いてくれよ！！」

サカキがギターと続ける前に口を挟んだヒイラギだったが、ヒイラギにしてみてもエンシノの贈り物を持ってきたトライデントの二人組に事務所をメチャクチャにされただけで事の本筋は掴めていない。ヒイラギはただ事務所に置いてきた新巻鮭とイクラの心配しか頭になかった。

真剣な表情を作りながらも

「……で、結局なんなんだよ？」

隣に座る二カに話を振っただけだった。

23

カウンターの方からチエカロツシが仕込みを始める音がする。

あと二時間もすれば店の中も人で混みあう事だろう。

二カはビールを一口飲むと口を開いた。

「二年前まで俺は、オルカって名前でトライデントの下で運び屋をやってた」

蝶子も初めて聞く話なのだろう。二カの顔を見つめたまま固唾を飲んで聞いている。

「普段は車を走らせるだけが俺の仕事だった。人や物は乗せても、取り引きの現場なんかには一切関わっていなかった」

再び二カがビールを一口飲む。

束の間の沈黙。

「……でもその日は違った。珍しくナギが俺の所まで来て直接命令したんだ。取り引き現場に立ち会わずの部下がケガしたから俺に



金を運ぶだけじゃなく取り引きもして来いってな。当時のトライデントは簡単に人員を割く余裕もなかった。相手は信用に足る人間だし、金とブツを交換するだけの簡単な仕事だから、お前でも大丈夫だろうって話だった。当時の俺は上にのし上がる事だけを考えてるどうしようもない下っぱだったから、ナギ直々の命令に浮かれちゃってた。バカだったのさ、深く考えもせずこの仕事が成功すればナギの印象が良くなるだろうってそんな事しか頭になかった」

サカキもヒイラギも真剣に話を聞いている。サカキはタバコに火を点け、無意識にヒイラギのビールをすすった。

「金を持って取り引きの現場に行くとツルミと名乗る男が一人で待っていた。マチの中では見た事のないヤツだったが、ナギが信用がおけるって言うてたから特に気にもしなかった。ツルミの持ってたブツってのはコカインだった。でも俺は薬のことなんかさっぱり分からなかったからアタツシケースに白い粉が入ってるのを確認すると、さっさと金を渡して、そのケースを持って意気揚々とトライデントに戻った。きっちり仕事をこなしたという満足感でいっぱいだった……」

二カが目じりの下の傷を少し搔いた。かつての自らの失敗を吐露する事への抵抗のように。

「……でも、そんな俺の満足感は一瞬で吹き飛んだよ。ケースの中身の白い粉をペロリと舐めるとナギは『こいつはコカインでもなんでもねえ、ただの小麦粉だ！』って激怒し始めた。俺は最初なんの事だか意味が分からなかったよ。でもすぐにツルミにはめられたって事に気づいた。だからそれを伝えようとしたんだが、それより早くナギがヤツ特有の暴発性を発揮しちまった。ヤツの導火線の短さはあんたらも知ってたんだろ？ 実はオレの前にも似たような事があって、ヤツの導火線は、普段以上に短くなってたってわけだ。ナギは銃を抜くと『てめえ、ブツを盗みやがったな！！こんなもんで俺を騙せると思ったのか？』叫ぶなり、いきなり銃を弾きやがった。そしたらあとはヤツの部下がぞろぞろ集まってきてはメチャク

チャに銃を撃ち始めやがって、俺は命からがら逃げたってわけだ。顔に二カ所の傷だけで逃げ延びる事が出来たってのは奇跡に近かった。さっきのキバザメもあの場に居合わせた一人だ。もっとも二年前はもう少しスマートだったけどな」

ヒイラギがサカキからビールを取り返しながらかく。

「なる程ね、それでアイツ目の色を変えたってわけだ」

何にせよ問題が増えたってわけだ。サカキにはそう聞こえた。とかく組織というヤツはメンツを大事にする。メンツを潰した二カの事をトライデントが放っておいてはくれないだろう。

24

話を聞き終わるとサカキはタバコを揉み消した。ヴァルハラ支度部屋の灰皿は、吸殻で山が出来ている。

「一通りの話を整理してみたわけだが、ここでいう優先順位って何だろうなあ？」

サカキの唐突な質問にヒイラギが答える。

「何にせよ、一旦マチを出るべきだろ？ トライデントが狙ってるのは二カだけだ、マチの外までは連中も手を出せないはずだぜ？ そっから仕切り直しさ」

サカキがすぐに反論した。

「何の目的もなしに？ ……違うな。ここでいうところの優先順位ってのは、二カがボコボコにした後死んだおっさんのことを調べるって事さ」

ヒイラギが困惑した表情を浮かべる。

「何の為に？ 今はそんな状況じゃないだろ」

サカキは再びタバコに火を点けるとゆっくりと煙を吐き出す。

「『こんなメンドウ事、引き受けるのはサカキとヒイラギくらいのももの』か」

サカキがしみじみと呟く。

ヒイラギが「はあ？」と聞き返す。

「これは最初っから二力の言葉なんだよ。どうして命の危険を冒してまで二力が蝶子をこのマチに連れてきたと思う？ 二力にもしものことがあっても一度仕事を引き受けた以上、オレ達が蝶子の事を守ると踏んでたんだよ…… 二力は死ぬ覚悟だ」

蝶子の愛らしい瞳が大きく見開かれる。

二力は何も反論しなかった。

対照的に大声を上げたのはヒイラギだった。

「じょうだんじゃねーぞっ！！ ずっとオレらに嬢ちゃんのお守りさせる気か！！」

興奮するヒイラギを諭すように、サカキが冷静に続ける。

「まあ、そういう事さ。結局のところ一番は、蝶子の求める真実ってヤツをさっくり見つけて。二人には五体満足でマチを出てもらうってこった」

サカキがちらりと蝶子の顔を見る。それは怒りとも嘆きともつかない表情だった。

ただ、蝶子の右の瞳からは一筋の涙が流れ星の様に頬を伝って落ちた。

25

狂言的通り魔事件のその後を調べるという事で納得した一同だったが、何の糸口も見出せないまま暗礁に乗り上げていることに変わりはない。

おまけに二力の気持ちを知ってしまった一同は互いが互いの氣を使う、初めて会った者同士の様に押し黙っていた。

それを払拭するようにサカキが口火を切った。

「なあ、蝶子のホームページってのに今頻繁に覗きに來てるヤツっていないのか？ ほら、言うだろ、容疑者は再び現場に戻って來るって。ひょっとしたら蝶子のホームページを利用して情報を得てた

ヤツがいたんじゃないか？ それなら、そいつが顔を出すかもしれないんじゃないか？」

蝶子がおずおずと答える。動揺から抜け出せずにいるのか、声に力がない。

「事件があつた直後、ホームページは消したの。誰にも気づかれなようにするために」

サカキが的確に指摘する。

「それは逆効果だ。今まで見る事が出来たヤツにしてみれば、急に見れなくなった事に疑問を持つはずだ。それと今回の事件との関連性について勘の良いヤツなら気づくかもしれないぜ？」

蝶子の顔が青ざめる。重くするしい空気を払拭しようとしたサカキが、一同を再び沈黙の闇に引きずりおろした。

長い時間が過ぎたように感じたが、実際は一分と経っていなかった。そこに響いた二力の言葉にサカキは救われる気がした。

「土壇場になつて躊躇したり、取り止めにしたいたい人間の為に、当日一度だけ電話して良いルールになつてるんだ」

サカキが大げさに頷いてみせる。確か蝶子がそんな事を言っていた気がする。

「でもあの日は二度電話が掛かつてきた。一度目は約束の時間より遅れるつて事だった。これは躊躇する人間だったら結構ある事だから、特に気にはならなかった。でも、それからしばらくして二度目の電話が掛かつてきた。もう少し時間が掛かるから待ってくれつて話だった。電話は一度だけつてルールだから、二度目の電話が掛かつてきた時点で俺は降りても良かったんだが……」

「帰んなかつたつてわけだ」

頬杖をつきながら、ヒイラギが口を出す。

「でも、それつておかしくないか？ 携帯の番号のやり取りなんていう足の付くような事してたのか？」

ヒイラギの素朴な疑問に二力が答える。

「一応、最初の契約の時点で携帯の番号は教えて貰つてる。結局、

電話を掛けてくる人間は土壇場でやめるようなヤツだし。こっちの携帯は携帯屋から手に入れてくるヤツだから一回限りの使い捨てで足が付かない」

携帯屋と言われる人間がいる事をヒイラギも知っていた。

一人の人間が多数の携帯の名義登録はしているものの、それを別の人間に売り渡すという事があるらしい。それを使う事により足が付きにくくなるのは勿論だがそれによる犯罪も増えた為、最近では取り扱いが厳しくなったり、金額が確段に値上がったらしい。

二力が話を続ける。

「それで、どうしても気になる事があるんだ。」

二力はごそごそと懐にいった手を抜き出す。二力の右手が持っていた物は携帯電話だった。

「お前、処分してないのかよ！」

ヒイラギの非難を制する様に二力は話を続けた。

「聞いてくれ。これはGPSなんてのがついてる様な立派な物じゃない。持つてただけじゃ大して役に立つものじゃないんだ。登録してあるのも死んだワタナベヨシノブ一件のみ。そのワタナベの携帯を警察が持つてるなら、掛けてくるんじゃないか、普通？」

ヒイラギが呆れた顔でケチをつける。

「警察が持つてんならな。死んだワタナベから金目の物をパクったヤツがいるかもだろ？　だとしたらソイツが掛けてくるわけねーだろ」

「じゃあワタナベを殺したのはその携帯を持つてるヤツの可能性大だな。俺じゃなくて」

二力がうつすらと笑みを浮かべる。サカキもヒイラギも二力が笑うのを初めて見た。

言い負かされて苦い表情を浮かべるヒイラギをじっと二力が見つめ直す。

「でも、俺はそう思っていないんだ。あくまで俺の勘だけど……」  
あくまで勘などと言いつつも二力の言葉に揺らぎはない。

「……電話でも話した男と死んだワタナベは別人かもしれない」

26

チエカロツシが仕込みをするガチャガチャという音が止み、客相手にビールを注ぐ音が聞こえた。

いつもなら日中一番遅くまで飲んでいるのもブラジル人たちだし、夜になって真つ先にヴァルハラを訪れるのもブラジル人だ。そんなわけだから彼らはいつ何をして働いているのか分かったものではないが、このマチのブラジル人は陽気で、サカキもヒイラギも酒を奢って貰った経緯もあり彼らの性格も人柄も嫌いではなかった。だが、その彼らにしてもまだヴァルハラにやって来るには早い時間だった。チエカロツシの注ぐビールの音が聞こえる程にも、ヒイラギがぼんやりとそんな事を考えられる程にも二力のその発言は辺りをしんとさせた。

「電話の後、ワタナベの後ろ姿を見た時に違和感を感じていたんだ。電話の相手の慌てた話し方に反して、実際に俺が見たワタナベの後ろ姿はそんな様子が微塵も感じられなかった。あまりにも自然だったんだよ」

サカキが「確認はしなかったのか？」と尋ねる。

「それはルール違反だよ。自分は約束していた者ですが、本当にあなたをこれからボコボコにしてもいいんですか？　つてのは聞けないだろう？」

二力が苦笑いを浮かべながら答える。ごもつとも、というようにサカキが頷く。

ビールを飲み干したヒイラギがタバコに火を点ける

「つまりこういう事か？　電話の相手がワタナベを名乗ってお前らに依頼した、と。じゃあトドメを刺したのもソイツか……？」

さすがに二力もソイツに違いはないとは、言い切れなかった。何の確信もないのだから……。

少しだけ目を瞑りながら、ヒイラギはタバコの煙を吐く。せつかの盛り上がりどころに水を差すことに対しての、ほんの少しの罪悪感からだ。

「……その話には大きな穴があるよ」

蝶子の描いた迷路を指差す。

「そのワタナベが殺された場所は路地裏だ。自分の意思でもなければ、そんなトコにわざわざ入っていかないだろ。お前らに依頼したヤツがいたとして、都合良くそんな所に誘導できないだろ」

ここでヒイラギの指摘に答えたのは、以外にもサカキだった。

「なんだ、そんな事が」

別段、気にするほどの事じゃないという表情。

「見る、ここにタバコの自販機があるんだよ。ワタナベがそこでタバコを買うのを日課にしてたなら、ワタナベの行動を予測するのもそれほど難しくないと思うぜ」

サカキの指差すところに「タバコじはんき」と書かれているらしいのが何とか読み取れた。ワタナベの殺された路地を抜けた大きな通り沿いに設置されている。

「……ところでヒイラギ、タスポって知ってるか？」

サカキが思い出したかのように、マチの外で知り得た知識を披露しようとする。話が脱線するのを制すると、途端に話自体の進展も尽きた。

また沈黙が訪れようとした矢先

「そうだー！」

蝶子の素つとん狂な声が響いた。

先程まで青い顔をしていた童顔が、今では彼女特有のあの気持ち悪い微笑みを取り戻している。

「なんで気付かなかったんだろう。そうよ、ドリームキャッチャーよー！」

一人悦に入る蝶子を尻目に、おかしい表情で訳の分からない事を言い出した彼女を見てサカキとヒイラギも「かわいそうに、この娘

はついに壊れてしまったんだな」という哀れみの視線で蝶子を見た。その視線に蝶子は気づく様子もない。

「電話番号が分かるならその持ち主を調べればいいんじゃない。ね！」

蝶子は大発見でもしたかのように目を輝かせる。

早速、ヒイラギがケチをつける。

「あんな、電話帳を調べるのとわけが違うんだぞ」

「だ、か、ら……」

蝶子が勿体つける様に話す。

「お金さえ払えばどんな情報でも手に入れてくれる天才ハッカー。ドリームキャッチャーに頼むってわけ」

蝶子いわく、そのドリームキャッチャーなる人物はパソコンとネット回線が繋がっている所にはどこにでも入り込めるという事だ。携帯番号からその偽ワタナベの本名や住所くらい調べるのはわけがないという事らしい。

ソイツの携帯が携帯屋から手に入れてるものなら意味ないだろう、と思いつつもヒイラギは話の腰を折らなかった。目指すべき道もよく見えないが、これ以上立ち止まっても、埒は明かないだろう。

「そうと決まれば、このマチでパソコンがあってネットが出来る所ってどこかしら？」

蝶子は今にでも走り出しそうな勢いだ。

「大抵の組織は整備してるだろうが、使わせてくれと言って使わせてくれるはずもないだろう、と、なれば……」

二カの話サカキが引き継ぐ。

「……となれば、図書館しかないだろうなあ」

言い終えたサカキが珍しく、ヒイラギの短くなった吸い欠けのタバコを頂戴すると、いつもよりキツめのニコチンを体内に取り込み、タバコを揉み消す。どうやら愛用のメンソール味は切らしたらしい。



「蝶子、小銭持つてる？」

五百円玉を蝶子から貰うとサカキは立ち上がる。

「……ヒイラギ、お前タイイクって好きだったか？」

「は？」

ヒイラギは理解にとまどいながら

「……タイイクって学校の授業の体育か？」

サカキが小さく「そう」と答える。

「……まあ、俺はどっちかってたら個人競技の方が好きだったけど」

サカキが小さく笑う。昔を思い出す様にのんびりと喋る。それはサカキにもヒイラギにも普通にあつた普通と呼ばれる時代の思い出。「お前、足だけは速かったもんなあ。俺は球技とかのが好きだったな」

ヒイラギはサカキの話の軸が良く分からずもどかしい表情だ。

「でも、必ず体育ってサボるヤツいるんだよな。で、決まってる行くのは屋上だったり、保健室だったり……」

そこでようやくヒイラギはサカキの言いたい事。つまりはなぜヴアルハラに身を隠す必要があるのかという事を理解した。

27

バーのカウンター席では、二人組の今夜初めての客がビール片手に愚痴を言い合っていた。

「やってらんねえよな。このくそ寒い中、マチ中駆けずり回ってなんかいらねえよ」

相棒らしい男が相槌を打つ。

「全くだぜ。幹部連中はあつたけー車の中で居眠り半分って話だぜ？ 下っ端は足で仕事しろとよ。俺らは叩き上げの刑事かっての！ 二人でゲラゲラと笑い出す。

「はぐれ刑事だな」

「そうそう、はぐれちゃんだから、こんなところでビール飲んてたって仕方がない」

そう言って、今日何度目かの乾杯を交わす。

「それにしても……」

「ナギのヤツは人使いが荒くて仕方がない。だろ？」

愚痴の続きを言われギョツとした下っ端が後ろを振り返る。

もう一人も遅れて振り返る。

そこには支度部屋からこっそりと忍び寄ったサカキとヒイラギが立っていた。

「てめ、サカ……」

サカキが銃をこめかみに押しつけるのも、もう一人の首筋にヒイラギがナイフをあてがうのも、下っ端がセリフを言い終えるより速かった。

チエカロツシが無言ながら、鋭い視線を送る。

大丈夫、店の中じゃやらないって。ヒイラギがわざとらしく、大げさにウインクして見せる。

サカキがゆっくりと質問する。

「今回のマンハント。トライデント本隊が動いてんのか？」

「誰がてめえなんかに！！」喚いていたわりに下っ端はあっさり口を割った。組織への忠誠心もたかが知れているらしい。

「……動いてんのはナギさんの部隊だけだ。」

「ふうん」素っ気無くサカキは聞いている。

今回のナギの独断であれば、動かせる兵隊も限られるはずだ。

ナギの私兵なら三十人にも満たないだろう。その程度であれば、マチの隅々までは目が行き届くことはまずない。これで大分動きやすくなった。そして何よりナギの独断で動いているなら、まだ他の組織には知れ渡っていないだろう。

だが疑問も残る。なぜトライデント本隊が動いていないのか？

狙いが二カ一人なら話は別だが、サカキとヒイラギが付いている

と分かった以上、もつと兵隊を集めても良さそうなもんだが……。ひよつとして、なめられてる？ いや、ナギの性格上、毛嫌いしている自分達を潰す良い機会のはずだ。エンシノに進言してもおかしくないだろうに……。

ヒイラギがぐるぐると思考を廻らせているのを横目に、サカキはさつさと自分が銃を突きつけていた下っ端を銃の握りで殴って気絶させていた。

ヒイラギはそういう事は苦手なので、サカキにさつさと譲って気絶させてもらう。

チエカロツシは、床に昏倒するトライデントの下っ端の事など気にする素振りもなくグラスを磨いている。チンピラが酔いつぶれて床に転がっている様など日常茶飯事といえばそれまでなのだが。

「マスター」

サカキが蝶子から貰った五百円玉をチエカロツシに放り投げる。

チエカロツシはそれを受けとると、分かっていると云わんばかりにポケットから取り出したものをサカキに放った。サカキが受け取ったものは彼愛飲のメンソール味のタバコだった。

さすがマスター分かってらっしゃる。サカキが軽く笑みを浮かべる。

「早く一息つけて、マスターの梅サワー飲みに来たいもんだよ」

チエカロツシはうんともすんとも言わなかったが、始終をカウターの裏で見ていたカルマは「二度と来んな！！」と喚いていた。

28

図書館はマチの中心の程近くに位置している。

トライデントの連中はその多くをマチの出口の見張りに割いているはずだ。人目を避ける裏路地を歩いてきたとはいえ、図書館までの道すがらトライデントの連中と出くわす事はなかった。

図書館はネロファミリー、スバルの所有する施設の一つである。今から七年程の昔、組織の強さは武力だの、しのぎだのという時代に革新的な考えの持ち主が登場した。それがスバルだ。

彼は情報を支配する事こそ組織力の強さであると提案し、かつては市の所有物だったマチの中では何の役にも立たない廃屋同然の図書館を、一転ネロファミリーの情報基地へと造り変えた。

情報を支配したネロファミリーは武力においても、しのぎにおいても以前の倍の力を得るに至り、スバルもまた現在の地位に至るわけである。

情報処理室と呼ばれる五つの部屋には、最新のコンピュータと世界中に瞬時に繋がる回線が配備されており、どこからかさらわれてきたに等しいハッカーなる人種が缶詰にされて、昼も夜もなくコンピュータとにらめっこしているらしい。だが、その五つの部屋はいつになっても埋まる事はなく、常に二部屋が空いているというのはもつぱらの噂。

もともと市の所有物だった図書館には、そんな物好きなどほとんどいるはずもないが、引き取り手のいない蔵所が放置されている事もあり、条件さえ満たしていれば誰でも入る事は出来る。もちろん最新のパソコンの設置された空き部屋二つも無料で開放されていた。ただし、サカキもヒラギもその条件を満たしてはいないのだが……。

ここでいう条件とは、五人いるネロファミリー幹部の誰でもいいから許可を得るというもの。それ自体はさして難しい話ではない。連絡さえつけば、スバルはあっさりと許可をくれるはずである。スバルが図書館に居てくれさえすれば何の問題もないが、何かと忙しいスバルが居るとは限らない。スバルにしても彼の所有する施設は図書館だけではないのだから。となると、施設を管理するのは、スバル直属の部下という事になる。

スバルの所有する五つの施設を管理する五人の直属の部下。ネロ

ファミリー、スバル派の五人の幹部達は、スバル心棒者ともいうべき実直さをもつて勤務に全うしている。早い話が、融通が聞かないのだ。おまけに、スバルの優遇を受けてなお組織に属そうとしないサカキとヒイラギに対し、主の面目を潰されたような、恨みにも似た感情を勝手に持つている者も中にはいるわけで、迷惑甚だしいところの上ない。

彼らさえいなければ馴染みのサカキとヒイラギは条件を満たす、満たさないに関わらず、顔パスで入れる事だろう。最悪スバルがいなくても良いが、彼らにも居て欲しくない訳である。

気を引き締めるように小さく息を吐くとサカキが先陣を切って歩き出す。ヒイラギ、蝶子、二カも後に続いた。

時刻は夜の七時を過ぎ、寒さも厳しくなってきた。

図書館の入り口で黒いスーツ姿の男達が声を掛ける。あつと言う間に六人の黒服に周りを囲まれた。

「サカキ？ 珍しいな、お前ら。こんな所に何のようだ？」

見た事のない男と女を連れているサカキたちに興味を示しては視線をちらつかせるが、声のトーンは至つてのんびりしたものだ。

サカキが真剣な顔をして答える。

「いや、人生やり直そうと思ってさ。小四くらいから勉強しなおそうかなって」

黒服達が声を出して笑った。

「はは、あんまり頭使いすぎて壊さねーようにな」

黒服の人だけに隙間が空いた。通つて良いという合図。

それを通して終え、ホツとしたのも束の間、広い施設特有の反響を伴って叱咤する声が響いた。

「何をしているッ！！」

「何をしていると聞いているんだ!!」

確認する必要もないだろうに再び声を張り上げる。

図書館の正面ホールに仁王立ちしている声の主／叱責する薄紅色の唇／切れ長の瞳＝琥珀色／瞳に軽くなる黒髪　サラサラとしたショートヘア／血管の透き通るような白い肌と白い服　あまりに女性的。

サカキ達を通した黒服が、琥珀の瞳に視線を合わせられないままに、おずおずと歩み出た。

「いや、サカキ達が使用したいという事だったので通したんですが……」

「許可は？」

素早く鋭く、仁王立ちの姿勢と石のような表情を崩すこともなく薄紅色の唇が問うた。

「……でも、ミカツキさん。こいつらサカキとヒイラギですよ。後ろの二人は知らない顔ですけど、スバルさんなら通すと思って……」  
ミカツキと呼ばれた？男？は鋭い切れ長の瞳をさらに鋭くさせる。発する声音は冷徹そのもの。

「お前はスバルさんか？　お前に許可を与える権利があるのか？」

黒服は「違います」と答えると、伏し目がちに「すみませんでした」と言つてそれ以上の言い訳はしなかった。

ミカツキの顔を見た瞬間、サカキが小声で「ついてねえ」と呟いたのをヒイラギはしっかりと聞いた。

スバル派幹部のミカツキは、スバル心棒者の彼らの中でも特に好戦的な性格の持ち主だった。今も変なポンチョ風のマントを羽織っているが、そのマントにしては短い裾から刀の鞘が見え隠れしていたし、柄を握っているらしいのもすっかり見て取れた。いつ斬りかかってくるか分かったものではない。

テツにナギにカルマ、それにミカツキ。　この二日でサカキとヒイラギを毛嫌いする人間に四人も会うなど、そうあることではない。……ありがたくはないが。

サカキが黒服の弁護をするように間に割って入る。

「悪い、ミカツキ。図書館使うのに許可が必要だなんて知らなかったんだよ」

サカキの白々しい嘘。

ミカツキの淡々した回答。

「そういうことだ。お引きとり願おうか」

食いさがるサカキ。

「そう硬いこと言うなって。次からはちゃんと許可取ってくるから、今回は特別って事で」

ミカツキが少しだけ姿勢を低くした。前に出した右足に体重をかけ始める。

「無理だと言っている」

次にサカキが何か言えば、切りかかってくるに違いない 問答  
無用。

とはいえ、何の当てもなくここを出た所で埒も明かない。当然サカキも引くに引けない。

緊迫した空気が流れる。ミカツキは切りかかるタイミングを計っているし、サカキはミカツキが納得する返事をフル回転で考えている。ヒイラギはナイフを抜くに抜けずヤキモキしているし、二力は身動き出来ず、蝶子は瞬きも出来ない。

その僅か一分程度の睨み合いが、一時間とも感じられる程に高まったその緊張感を破るように、ホール脇のエレベーターが「チン」とあまりに間抜けな音を立てて開いた。

そして中から場違いに騒々しい声。

「わーかってるって。どうせ俺には株なんて無理だってんだろ？  
つつたつて、こんだけ損すりゃ荒れるっつーのー!!」

二人の人影。

ギャーギャーと喚く男に相槌を打つわけでもなく、口に啞えた手製の紙巻タバコを弄んでいるもう一人の男。

騒々しい男はまだ何か言いかけようとしたが、紙巻タバコの男が

立ち止まったのを見て、ようやく事態に気づいた。  
「なんじゃ、こりゃあ？」

ジンだ。

30

「……で、どうしてこんな愉快な事になってんだ？」

目を輝かせるジンとは対照的に、ジン派の？2ヘイズは愉快的事など何もないと言うように、いつものポーカーフェイスで愛用の紙巻タバコを転がすだけだった。

サカキの説明を聞いて、「ふうん」と納得しつつも先程とは打って変わって退屈そうな表情のジン。

自他ともに認める戦闘狂たる彼ではあったが、他人の戦いとなれば別である。自分の介入する余地がないと知るや否や、一気に興も冷めたらしい。

あくびをしながら「じゃ、通してやれば」と投げぎみに言った。

ここで引けるか、意地になるミカヅキ。

「そう言うわけにはいかないですよ」

一変、ジンの表情が険しくなる。

「俺は誰だ？ ネロのジン様だぞ！！俺が良いって言うてんだよ」  
瞳の鋭さは変わらぬままに、しかしミカヅキは少しだけ俯く。

ネロの大幹部たるジンにそこまで言わせては、ミカヅキも引かないわけにはいかない。

「……分かりました」

そう呟くと踵を返して場を立ち去った。

ミカヅキの部下たる黒服達も含めて、場に安堵の空気が流れる。

「ジンさん、助かりました」

サカキの礼を何となく聞きながら、ジンは二力と蝶子を品定めでもするように下から上に眺めている。



一通り眺め終えると、サカキの顔をまじまじと見た。

「一口貸しな」

そう言ってキヒヒと笑うと、ジンはヘイズを従えて図書館を後にした。

31

パソコンのある情報処理室は図書館の二階にあった。

五部屋あるうちの三部屋からは確かに人の気配がしたが、別に挨拶する必要もないだろう。

蝶子とサカキは部屋に入ったが、ヒイラギと二力は特にする仕事もない為、部屋の外に寝床を作る事にした。少し硬めながらクッション地の椅子は売る程あるし、図書館内は暖房も効いている。これでちゃんとした食事が取れば至れり尽くせりなのだが。

「チエカロツシのところで何か食ってくれば良かった」

ヒイラギの後悔。

気づけば今日はまともな物など食べていない 何もしていないと考えてしまうのは、ただただ新巻鮭といくらへの遥かなる想いだけ。

仕方なしに蝶子が後生大事に持ってきたK市のお土産をご開帳。

紙袋の中身は二箱とも大福。

ずんだ、抹茶、生クリームと味が三種類あったのはせめてもの救い。それでもやはり物足りない。嘆いているとサカキが得意満面でこちらも大事に抱えてきた土産をこれ見よとばかりに突き出してきた。微かな期待を抱いてヒイラギが封を開ける。箱の中身は……。

「ってこれカモタマじゃねーかつー!!」

ヒイラギの叫び サカキを信じた自身の愚かさ。

ほくほくの黄身餡をホワイトチョコレートでコーティングしたその菓子は、ここいらでは超定番。もちろん町で簡単に手に入る。

「うめえだろうがカモタマはよお!!」

負けじとサカキの叫び　カモタマの擁護。

確かにうめーよ、でもなぜこの瞬間にカモタマなんだよ……。サカキのカモタマに対する情熱を上で聞きながら、ヒイラギは言葉を飲み込む　サカキいつもの屁理屈の始まり「ヒイラギいつもの負け戦。

気持ちのひもじさを食欲に変えて、ヒイラギは大福もカモタマも口に詰め込む　サカキの「食べ！　むさばり食べ！」という高笑いを聞きながら。

大福にしるカモタマにしる、甘いということに変わりはない。図書館内の自販機ではお茶が大人気だ。

大福。

お茶。

カモタマ。

お茶。

……。

……。

四人がかりで三箱分をあっという間に空にしたとして、満足感の欠片もない。

サカキに至っても「気持ちが悪い」と言い出す始末。

「……ゆっくり玉露のお茶でも淹れて、味わいながら食べたかった」  
蝶子の嘆きは、そのまま全員の嘆き。

何にせよ、教訓として主食も副食も大福とカモタマにしちゃいけないってこと、だ！

32

部屋の中で蝶子がキーボードを叩くのをサカキは感心して見ていた。よくもまあそんなに速く打てるものだ、と。

「今さらで何だが、ソイツは本当に当てになるのか？」

サカキが図書館の中だというにタバコに火を点ける。このマチに禁煙という概念は存在しない。

「腕は確かだよ。『全とお見通し』が口癖の人だもの」  
パソコンの掲示板に蝶子の打った赤い文字が表記される。

オヒサシブリ（＜|＞）チョーコです。ジツは調べて欲しい事があるのですが・・・？

蝶子の文字が消され、ピンク色の文字が現れる。

お久さし？ チョーコちゃん・・・それってひょっとしてK市の事件と関係ある？（@|@）？ ドリキチ？

サカキが叫ぶ。

「おい、こいつー！」

その文字は五秒程で画面から消えた。

「さすが、ドリームキャッチャー。何でもお見通し……ね」

蝶子は動じる様子もない。

「やばいんじゃないか？ これ以上は関わらない方が……」

サカキは慌てたが、蝶子はキーボードを打つ手を止めようとはしない。

「大丈夫。切り札は持つてるから」

画面に蝶子の赤い文字。

さっすが（パチパチ） で、ジツはケータイ番号から持ち主を特定して欲しいのですが・・・デキマスル？

お金は払うよオ （¥|¥）？

「私、昔ネットアイドルなんてしてて、結構人気もあったんだよ。

そのオフ会で彼と会った事があるんだ」  
蝶子の文字が消えていく。

ドリームキャッチャーのピンクの文字。

ドリをダレだと思ってるんのだ。サクッと調べたげるヨ。オ・カ・  
ネも今度デートしてくれるなら10万円でいいヨウ？

「ドリームキャッチャーを騙る人間って結構いるんだよね。彼も正直胡散臭かったし、身なりも綺麗とは言えなかったけど、時計だけはすごく高いヤツしてたんだよね」

蝶子の赤い文字。

ワイイ（＾o＾）ウレシ。調べて欲しい番号ですが090 - x  
xxx - xxxxxデス。ヨロシクお願いしまーす？ ？

消える文字を眺めながら、サカキが声をかける  
「そいつが本物だと思う証拠がそんな時計だけってのもなあ……大体それが安物の偽物って事もあるだろ？」

蝶子が少しむくれる。

「あのね、私はモトいいところのお嬢様で、パパは日本有数の時計コレクターだったのよ。小さい頃からずっと見てたから、時計の目効きに関してはプロ並みよ。あんな時計、パパ以外でしてるの見たの初めてよ。あれは百や二百じゃ買える代物じゃあないわ」

サカキは疑しいものだ、というように話を聞いている。

「それに……」

蝶子はおずおずと話を続けた。

「それに、彼を本物だと思う一番の根拠は……女の勘よ」  
一瞬の間。

「……そうか。じゃあ間違いないな」  
サカキが驚く程あっさりと納得して見せた。

女性には生まれつきそう言うものが備わっているらしい。それを教えてもらったのはもう8年も前になるだろうか。それ以来、サカキはそれを信じている。だが、それで解決と言う訳にはいかない。

「でもよ、それは顔を知ってるってだけで、切り札にはならないだろ？」

蝶子は少し誇らしげに答える。

「だから私、尾行したの。彼ね、以外と近くに住んでるのよ。多分このマチからそう遠くはないはず」

サカキは半ば呆れている。

「つてお前、S市に住んでんだろ？」

蝶子は意にも介さない

「うん。だから新幹線やタクシー使って。四時間くらいかかったかな？ 結構バレないものね」

サカキは呆れるを通り越して大声で笑った。無意味に行動的な彼女の性格は今に始まったものじゃないらしい。

「そうか。じゃあ、そいつが何か変な行動でもしようもんなら……」  
蝶子が握りこぶしを作って見せる。

「力ずくつてわけよ。頼りにしてるわね」

セリフもポーズも蝶子には似合わず、サカキはまた声を出して笑った。

一分とかからずに掲示板にドリームキャッチャーのピンクの文字が表れた。

カメガサワ ケンジ？

住所 I 県M市……？

お金の振込先 ×銀行……。ヨロシク？

蝶子は素早くメモを取る。そして手速くキーボードを叩き、作業を終える。

アリガト。タスカリマシタ（＾o＾） -      お金は明日振り込みます（u?u）ゝ？

その文字が消えるのを確認して、蝶子はふと部屋の窓を見上げた。窓の外にくすんだ闇、ぼんやりと照らす月光。

「明日は雪が降りそうね」

ふわりとこぼれる蝶子の声。

サカキも窓から空を見上げる。

「マジで？」

「うん、月を見て……ほら傘をかぶってる」

蝶子が月を指さす。闇夜に満月がぼんやりと浮かんでいる。

「……何が？ ウサギが？」

サカキの素朴な疑問に、蝶子は「そうね」と答えると、クスクスと笑った。

## 花と蝶 4

33

「ほんとに雪が降ってるよ」

さめざめと言うとサカキはダッフルコートの襟を正した。

昨夜遅くから振り出した雪が、地面をうつすらと覆っている。

空を見上げると闇に吸い込まれそうだ。

朝五時過ぎ。夜はまだ明ける気配もない。

四人は身支度もそこに図書館の入り口に立つ。

仮眠というには図書館の簡易な寝床は十分な睡眠を提供してくれ  
たわけだが、サカキにしろ、ヒイラギにしろ、こんな時間から起き  
出しているのは今年何度目かの奇跡である。サカキはずいぶん久し  
ぶりだという事を彼独自の言いまわしで例える。

「とつき十日ぶりだな」

……もちろんそんなわけではないのだが。

サカキが図書館入り口に備えつけてある自販機から、もちろん蝶  
子のお金で、コーンポタージュスープを購入し皆に配る。

早々に手袋をはめたヒイラギは缶のタブを開けるのに苦労した。

昨日ダイマルから借りた軽自動車は、マチの東側にあるジャンク  
山に一旦隠していた。他に適当な場所がなかっただけの話だが、物  
を一時隠す場所としてはジャンク山程都合が良い所はないだろう。

とはいえ、サカキ達がネロファミリーの施設に身を潜めている事  
などトライデントの連中は知る由もないだろうが、普通に考えれば  
身を潜める所として真っ先に思い浮かべるのがジャンク山、そして  
その奥に控えるマンションと呼ばれる建物であるから、トライデン  
トの手が伸びている可能性は高い。それを踏まえての早起きである。

あとは彼らの勤労への不誠実さを願うばかりだ。

蝶子とニカはコーンポタージュを早々と飲み干し空き缶をゴミ箱に捨てようとしたが、ゴミ箱はすでに溢れんばかりだった。自販機内の補充はされるのにゴミの回収などする気はないらしい。このマチには需要と供給という言葉は存在するのに、リサイクルという言葉は存在しない。

先日、サカキが誰かの受け売りだろうエコロジーについて熱く語っていたが、今その話を振れば彼特有の屁理屈で長くなるはずだからやめておこう、ヒイラギは一人で納得する。

飲み干したヒイラギがゴミ箱の前に空き缶を置いた。その隣に蝶子とニカも並べておいた。

サカキだけが缶の入り口に引っかかるコーンと未だに苦戦を演じている。

「もう諦めたら？」

ヒイラギの言葉にサカキはオカンムリだ。

「お前らは失礼だ……」

ヒイラギは小声で「嘘だろ」と呟く。

せつかくの気遣いも空しく、サカキの屁理屈の時間が始まるうとしていた。しかもこんな早朝から……。

ニカと蝶子は無言でサカキを見つめる。

「お前ら、最後まで食べきってないだろ？ いいか、これがどんな想いで作られてると思うてんだ？ これはな、このコーンを一粒、一粒、日系四世のムネチカさんが一族代々で剥いてんだよ。五世にあたる息子は言ったそうだよ。俺は都会でバンドマンになりたいって……。オヤジは何も語らなかつたらしいが、きつと心の中では、ああ、この仕事も俺の代で終わりがあって思ってたに違えねーよ。これはまさに今しか飲めない、そんなムネチカさんの想いの詰まった一つとして同じもののない世界に一本だけの飲み物なんだ！ ……」

と聞いた事がある」



嘘つけ。ヒイラギの目は冷やかだ　　ってというか息子の件、  
完全にお前の想像だろうが。

再びコーンポタージュとの苦闘を始めようとしたサカキに蝶子が  
声をかける。

「コーン剥くの、業者の機械があつという間にやってたよ」

サカキは缶を口に預けたまま尋ねる。

「……と聞いた事がある？」

蝶子がサカキの目を見据えたまま伝える。

「……見た事がある、テレビで」

サカキは、まだ粒の残った缶をゴミ箱の前にそつと置いた。

四本の空き缶が均等に並んでいる。

サカキは誰とも目を合わさずに振り返ると、これから歩み始める  
道路の先に広がる闇を見据えた。

「……じゃあ、行くとするか」

34

ジャンク山はうつすらと雪が積もり、遠目で見ると本当の雪山の  
ように見えて若干テンションが上がったものの、近づいて見るとや  
はりそれはいつもの不耗な光景でしかなかった。

ざつくばらんに積まれたジャンクがいくつもの小さな山を築いて  
いるエリア。手前側ではダンブカーが積荷を下ろしたのであるうが  
荷台が傾いたままになっているし、造りかけらしいビルの跡の三階  
部分にはどうやって乗せたのか鉄骨を吊り上げたままのクレーン車  
が風に吹かれて微かにその鉄骨を揺らしていた。

突然疫病でも蔓延し始めて、人々が逃げ出した後の様な光景を連  
想させる　民家に入ったら人はいないのに食べかけのご飯がその  
ままになっていて、触れてみたら「まだ温かい……まるで先刻まで  
人が居た様な」ってヤツである。

ダンブカーの脇の人影を遠目で確認しながら、ヒイラギがここに

来る度口にするお決まりのセリフを呟いた。

「シニールすぎて笑えねー……」

ダンプカーの脇の人影は三人までは確認できた。そのダンプカーの後ろに黒塗りのセダンが停まっていたが、その中までは確認できない。

サカキ達はジャンク山正面のさらに小さなジャンク山郡に身を潜めている。サカキはそれを（ジャンク山の）子供達と呼ぶ事にしたとの事だ。

ダイマルから借りた軽自動車はちょうどそのダンプカーの停まっているジャンク山の裏に隠してある。それはサカキ達の現在地からは左奥に位置していた。

ジャンク山の付近は辺りを囲まれているわけではない。目当てのジャンク山の裏を迂回していけばいいわけだから、正面から連中と構える必要はない。トライデントの連中はナギの兵隊である前にエンスノの兵隊である以上、サカキとしては不要に血を流したくない。ヒイラギもそれは十分に分かっている。しかし、迂回した先にも見張りがないとは限らない。そうなれば非常に都合が悪いのだ。軽自動車はジャンク山とジャンク山の間に隠してあるが、もしそこで連中に囲まれてしまうような事になれば退路を塞がれている以上、サカキやヒイラギはともかく、蝶子や二力の安全は保証出来ない。「と、なればだ」

サカキが早くも本日二本目のタバコに火を点ける。

「正攻法しかないな」

ヒイラギが手袋を脱ぎ、スイッチ式のナイフを両手に持つ。ヒイラギが昨日事務所を出る時、急いで着てきた深い緑色のジャケットには数本のナイフが仕込んであったが、そのどれもが仕込むのに楽な小型の物だった。

「囷<sup>デコイ</sup>役は苦手なだけだな」

サカキがダツフルコートのボタンを外し、腰の左に備え付けてあるホルダーから銃を抜く。

「まあ、気楽に行こう」

自分達が囷になって連中を引きつけている間に迂回して車を取ってくるよう二カと蝶子に指示を出し、歩き出そうとした矢先、一台の車がジャンクエリアに入ってきた。

サカキとヒイラギはとっさに身を屈め、その車をやり過ごした。

35

ジャンクエリアに入ってきたその4WD車は、黒塗りのセダンの後ろに停車すると中から一人の背の高い男が姿を現した。ホウキの様に尖らせた頭　尚更背を高くノリングやダガーだらけの細面Ⅱ数多のピアスで装飾された貌ノ鼻と右耳たぶの架け橋　ピアスを繋ぐチェーンノ口端から覗かせたスプリットタン　爬虫類を連想。男は丈の異様に長いコートを引きずるようにして車を降りると、気だるそうに車の扉を閉めた。

ダンプカーの脇をウロウロしていた人影が次々と頭を下げる。

セダンから出てきた右頬に大きな絆創膏をはった太りぎみの男も頭を下げた。そいつはキバザメだった。

\*

ホウキ頭の爬虫類が、差し入れの袋を渡しながら、  
「でえ、どうだぁキバザメ？」

缶コーヒーが何本も入っている袋を受け取りながら温かいのが一本も無いの確認すると、こいつは何かの嫌がらせか？　そう思いつつキバザメが答えた。

「いやぁ、わざわざスイマセン。全然、気配すらないですよ。マンシヨンの方を張ってるマツコウさんからも音沙汰はないですし……ガザミさんの方はどうですか？」

ガザミと呼ばれたホウキ頭はあくびをしながら喋る。

「ひゃあ、ふえんふえんだメだね。マチの出口全部抑えちゃいるが、引つかかる様子はねえな。とはいえナギさん自ら前線に立っている以上何も言えねえしな。結局、する事もねえからこうしてお前らがサボッてないか見て回ってんだけどよ」

ガザミが自分のコートのポケットから缶コーヒーを取り出すと口を開ける。中から湯気が立ち昇る。

「ま、サボった挙句にチエカロツシントコで氣い失ってるヤツもいたこつたし。氣い引き締めねえとなあ」

ガザミの言葉にキバザメが俯く。

「まあ、氣い失って見つかったのはお前も同じかあ」

ガザミがゲラゲラと笑う。

「ガザミさん!! キバさん!!」

氣持ちよく笑うガザミの声を掻き消すように部下の一人が声を上げた。ダンプの前をウロウロしていた見張りの三人ともが足を止め、同じ方向を見ている。

その視線の先にはのらりくらりとジャンク山に向かって歩いてくるサカキとヒイラギの姿があった。世間話でもしながら歩いてくるような姿には全くと言っていい程に緊張感がない。

「なんってこつた…… タナがボタ持ってやって来やがった」

ガザミが呆然と声を上げる。

「カモがネギしよってでしようが」

キバザメは汚名返上のチャンスとばかりに目を輝かせる。

「よっしゃ、キバ。マンションにいるマッコウ呼べ。あとチイヌとナギさんにも連絡な」

ガザミの命令にキバザメは不満氣だ。

「えーっ? 俺達だけでやりましようよ」

キバザメにしてみれば、人に手柄を渡す様な真似はしたくない。

「いいから、さっさとやれ」

それだけ言つとガザミは踵を返す。

「ガザミさんはどちらへ?」

キバザメの質問にガザミは後ろを振り返る事なく

「俺はちよい準備に時間が掛かるからよお。五分でいいから、お前らだけでもたしとけえ」

4WD車に乗り込む。同時に運転席からガザミの運転手をしてきたらしい男が銃を片手に飛び出してきた。

ガザミが車に乗り込むのを確認した後でキバザメはわざとらしく舌打ちをして、自身も携帯があるセダンへと乗り込んだ。

銃を撃つ音が聞こえ始める。

キバザメは手早く連絡作業を済ませると、セダンのドアを開け自らも戦場へ赴いた。その間一分と経っていないはずだった。

しかし颯爽と飛び出たキバザメは、四人いた兵隊が全員地面にうずくまり呻いている姿と、自分に向けられる銃口を確認した後、颯爽とセダンの中に舞い戻った。

サカキののんびりした声が聞こえる。

「おや、あれはキバザメくんじゃないか」

36

「知ってるかサカキ。勝負つてのは対峙した時にはすでに決しているものなんだぜ？」

「ほう」

私に理屈を説くのかね、先達のような眼差しでサカキはヒラギの話の聞いている。

「戦略を練るとか、あらかじめ切り札を用意しとくつてのはその為のモンだ。ほら見るよ、あいつらオレの前で構えた時点で負け決定だな」

トライデントの下っ端が銃を構えて集まりだした。その数、四人。サカキは突然笑い出した。

「ヒイラギくん。それはつまり君がここに至る前に知恵を使ったという事かい？」

冷やかなヒイラギ。

「お前ね、オレのこと何だと思ってるの？」

サカキの笑いは止まらない。

「お前はシンプル・イズ・ベストを絵に描いたような人間だろうが」  
ミリタリージャケットのポケットから取り出した二本のスイッチナイフのスイッチを押すと、ヒイラギの両手からナイフの刃先が飛び出した。

「分かってないなあ、サカキは」

言い終える前に、ヒイラギは地面を蹴って駆け出した。

「……あはあ……はっ」

笑いの余韻を引きずったままの含み笑いを浮かべたまま、サカキは銃を構えた、と思った瞬間にはすでに引きがねが引かれていた。  
4WD車から降り、最後に集団に加わった男が右肩を被弾する。  
吹っ飛ぶ仲間を横目に、残った三人は恐ろしい速さで接近しつつあるヒイラギに銃口を向けるが、長い間寒さでかじかんだ指は上手く引きがねを引けない。

男達の戸惑いを肌で感じながら、ヒイラギは右手のナイフをスタンダードに持ち替える。

瞬間、銃声。

照準のぶれた弾丸が右の頬を焦がした。

しかし動じることなく左手のナイフを逆刃に持ち替える。

速度を落とす事もなく見当違いの縦断の雨の中を駆け抜けた。

男達まであと数歩。一転、ヒイラギの姿が男達の視界から消える。  
跳躍。二人の男の間の上空を回転して地面に降り立った時には、銃を持つ二人の手の甲が深々と裂かれていた。

二人の男が銃を地面に落とすのと同時に、残った三人目もサカキの放った弾丸に銃を弾き飛ばされていた。

セダンと4WDを取り囲むように、サカキとヒイラギは進行を止

める事もなく四人の下っ端を片付けた。

サカキとヒイラギのつけた傷は致命傷とは程遠いものだが、長時間の寒さの中に身を置いて心も体も冷えきった人間の戦意を喪失させるには十分だった。

ヒイラギは造りかけのビル跡に背中を預けて様子を伺う。

サカキはヒイラギとセダンの間に立ち、銃口をセダンに向けた。

これで、取り敢えず残っているのはセダンの中に一人。後ろの4WD車に一人のはずだ。

一瞬の後、セダンが開いた。銃を握るサカキにも力が入る。

セダンから重そうな体を引きずるように男が現れた。自分では颯爽と出てきたつもりであろうと感じられるのがひどく滑稽だった。

メタボリックな男は地面に転がり呻いている部下の姿を一瞥した後で、自分に向かって銃口が狙いを定めているのに気づいた。一瞬その銃口を向けるサカキと目が合うと、彼はおずおずとセダンに戻っていった。

サカキがのんびりした声を上げる。

「おや、あれはキバザメくんじゃないか」

キバザメの滑稽な姿を見て笑顔を取り戻したサカキが「どうする？」とヒイラギのいる後ろを振り返る。

一転サカキの表情に緊張が走った。

「ヒイラギ右だっ！！」

警告を告げるサカキの声に反応するや、ヒイラギは素早く左へと飛ぶ。

背中を預けていたビル跡の角の闇から音もなく腕が生え　ヒイラギを襲った。

振り向きもせずに跳躍　緊急回避したヒイラギだったが、その腕は執拗に追って来た。

ヒイラギの予想以上に伸びる、その腕に取り付けられた鉄の爪を二本のナイフで防ぐと、ようやくにして動きが止まる。

腕がビル跡の角の闇の中に戻って行くと、その闇の中から声が聞こえてきた。

「つかしいなあ」

ホウキの頭に顔中ピアスだらけの長軀が姿を現す。この寒空の中、素肌にオーバーオールといういでたち。

180cm以上はある長身の男は、足も長かったがそれ以上に腕の長さが尋常ではなかった。先刻、遠目で姿を見た時は闇夜にコート姿で気付かなかったが、コートを脱ぎ露になったその両腕は自身の膝下まで届いていて、その不自然に長い両腕の甲に取り付けられた鉄製の爪は地面に届いている。

「大概のヤツは、今ので死ぬんだけどなあ」

爪で地面を穿り返す姿に男の苛立ちが感じられた。  
「つま、いつか」

言うが早いか、今度は両の腕でヒイラギに迫った。右左と交互に伸びてくる爪は、リーチもあるがスピードも以外とある。

左右のナイフで上手くさばくヒイラギではあったが、簡素なスイツチナイフが得物では分が悪い。何度目かの爪を捌いた時には、ビル跡の壁を背にして追い詰められる。

獲物を切り裂く為の武器にしちゃ、やけに打撃が重いな……。防御一辺倒に徹しつつも、つとヒイラギの脳裏に疑問が浮かんだままにその瞬間。

殺意が矢となって飛んだ　ヒイラギの顔面目掛けて。

男の右腕の甲、等間隔に並んだ爪のその端の一本が射出されていた。

血が滴る　首の皮一枚で避けたヒイラギの左の頬から。

壁に突き刺さるそれを見て、ヒイラギは男の得物、その正体に気



付く。

くそっ！ 特大の釘打ち機かよ！！

その釘打ち機からは相手を傷つけるというより、得物を礫にする為の臭いが強く感じられて、ピアスの重さでいびつに歪むホウキ頭目掛けて

「趣味の悪いーヤローめ」

ヒイラギは舌打ちした。

分の悪いヒイラギを目に留めてサカキが遅れて動き出す。しかし、爪の男に照準を合わせようとした矢先、ジャンクエリアの奥から白いセダンが一台飛び出してきた。

セダンは4WDの後ろに急ブレーキで停まるや、中から三人の男が飛び出す。

その内の一人は他の二人に待てを掛けると、持っていたショットガンを片手のまま装填し、そして片手のままで狙いを定めた。

相撲取りのような体格／相撲取りそのままの鬚<sup>まげ</sup> サイドは渦潮めいたトライバルのボウズ刈り／傷だらけの顔／はち切れんばかりの黒のカットソー／不自然に盛り上がった右肩 片手で担いだショットガン＝レミントンM870をぶっ放す！！

「ヤバい！！」

サカキが叫ぶ。

ヒイラギが転がる様に後ろに飛んだ。

爪の男もサカキの声に反応して後ろへ飛んだ。

飛び去ったヒイラギと爪の男の間にある、ビル跡の壁が粉々になっ  
って決れる。

大男は、ショットガンを撃った反応にも微動だにしていない。

「マッコウ、テメー俺まで殺す気か！！」

顔中砂塵まみれになった爪の男が喚いた。

マッコウと呼ばれた大男は「ふん」と大きく鼻息を鳴らすと

「ガザミにすら当たらんかったとは、残念だ」

鷹揚に言った。

転がるようにサカキの脇まで逃げてきたヒイラギは「耳がキーンとなった」と繰り返している。

サカキが小さく嘆息。

「……何はともあれメンドくさい事になっちまった」

38

サカキとマツコウと呼ばれた大男、ヒイラギとガザミと呼ばれたノッポのホウキ頭が、距離を置いて対峙した。

サカキとマツコウはビル跡寄り、ヒイラギとガザミはダンプ寄り、だ。

いつの間にか、マツコウが連れて来た部下二人の隣にキバザメも加って事の成り行きを見守っている。

サカキがタバコに火を点けた。啞えタバコのまま煙をゆっくり吐き出すと、だらりと垂れ下げた銃を持つ右手に力が入る。

「ふっ 飛べ」

マツコウに狙いを定めたと思った次の瞬間、ガザミの顔を射程に捉える。

サカキの射撃に合わせてショットガンをぶっ放そうとしていたマツコウは面食らい、ガザミは「えっ、俺？」と、間抜けな声を上げる。

サカキがゆっくりと引きがねを引いて放たれた銃弾は、顔を両手で覆ったガザミの爪に阻まれた。

「スゲー！！ 俺こんなの始めて！」

サカキがそう狙ったのだ、という事にも気づかず興奮するガザミ。しかし、自身の顔を覆った両の爪を顔から離れた時には、すでにガザミの視界にサカキはいなかった。代わりにヒイラギが、対角線上のマツコウ目掛けて駆け出していた。

左右に重心を移しながらヒイラギは駆ける。見た目通り俊敏性に欠けるマッコウはなかなか照準を定められない。

距離あと数mと詰めたヒイラギの眼前で、マッコウが「うおお！」と唸り声を上げながら背中に隠した得物を左手で取り出した。それは自転車なんかのチェーン。

片手でショットガンをぶつ放す怪力自満がチェーン？

ハンマーでも出すのではと期待していたヒイラギは……正直ガツカリする。その瞬間（やっぱり、殺そっかな）という思いが湧き上がったが、エンシノへの気持ちを考慮してはすんでの所で取り止めた。

マッコウが振り回すチェーンを右手のナイフで受け絡めると、そのままナイフを持つ手を緩める。

瞬間、ナイフを取り上げご満悦のマッコウの顔目掛けて飛び蹴りを喰らわす。軽量のヒイラギではあったがキレイに顎に入ったその蹴りで、マッコウはよろめいた。フラフラとビル跡の壁までよろめくが、何とか手について持ち堪える。

地面に着地するや再び駆け出したヒイラギは、壁際のマッコウにあつという間に追いついた。

そのヒイラギの後ろに、完全に機先を制され出遅れたガザミが迫って来る。

ヒイラギが身を屈めると、ガザミの爪はヒイラギの空を切りビル跡の壁を削りながら振り抜かれた。

振り抜かれた爪は、ビル跡の壁に手をついて小休憩しているマッコウの顔に新しい傷を作つてようやく停止した。

ヒイラギは何となく大男の顔が傷だらけな理由を理解する。

そりゃ、ついでに殺したくもなるよな。

怒り狂うマッコウが敵も見方も関係なく、近距離でショットガンをぶつ放す態勢に入る。

その刹那、高々と突き上げられたヒイラギの右の人差し指。

「上を見な。勝負つてのは対峙した時にはすでに決まってるもんだ

ぜ」

ビルの上部から、クレーンに吊られる鉄骨が風に揺られギシギシと音を立てていた。

「メンドクせえ」

風に乗って聞こえる　サカキの声。

ガザミとマツコウが辺りを見渡す。

消えたサカキがダンプカーの上に立っていた。

もちろんサカキの銃口は、鉄骨を吊るすワイヤーに照準を合わせている。

ガザミとマツコウがサカキに目を奪われている頃には、ヒイラギはビル跡から10m以上も離れた場所にいた。

ガザミとマツコウが泡をくって逃げ出した瞬間、サカキの銃声が闇夜に響いた。

難なくしてみせた命中精度の高いファニング射撃　一発の銃声しか聞こえなかったが、実際には二発の弾丸が発射されていた。

それは完ペキにワイヤーを捉え、そして完全にワイヤーを断ち切った。

傾いた鉄骨がバラバラと崩れ落ちる。

砂煙が上がった。

二人の部下とキバザメが、ガザミとマツコウの元へ駆け寄るその背後を、白い軽自動車走り抜けた。

命からがら鉄骨から逃げ延びたガザミが声を張り上げる。

「バカヤロ！　その車を抑えろ！！」

ダンプカーの前に急停車した軽自動車にダンプカーから飛び降りたサカキと、駆けて来たヒイラギが飛び乗る。キバザメ達が銃を向ける頃には軽自動車は急発進し、その場を後にしていた。

ヒイラギが後ろの窓を振り返った時、鉄骨の影から一際大きい人影がむくりと立ち上がるのが見えた。

どうやらマツコウも無事らしい。

ジャンクエリア一帯に広がる砂利道を駆け出すと、程なく舗装された通りに出た。

ニカの運転する軽自動車はペースを緩めない。

「でさつ、結局何なんだよアイツら？」

後部座席で息つくヒイラギが尋ねた。

ニカが別段楽しそうにでもなく、鼻で笑う。

「フィッシュャーマンズの事か？」

「釣りキチどもだあ？」

ヒイラギが眉根を吊り上げる。

「ナギのマチでの通り名を知ってるか？ フィッシュャーマン 太公望？ さ。元々ナギ

はマチに来るまでは詐欺、それもフィッシング詐欺で相当荒稼ぎしてたらしい。あの性格が災いして仲間に裏切られて、マチに来てトライデントに拾われてからもそんな時のノウハウ活かしてそこそこ稼いでたみたいだが、それだけでやってける程このマチは甘くない」

急ハンドルを切った後で、舌を噛みそうになるヒイラギを気にも留めずにニカが続けた。

「だからノウハウを活かしつつも、ナギは手荒な方法をとる事に決めた。マチの組織自体を狙いにして『釣る』事にしたのさ。とはいえ、当時まだトライデントの下っ端だったナギにそんな無茶をやらかす裁量は与えられちゃいなかった。だから専属で雇ったってわけさ、あのクソつたれの殺し屋どもを」

「アイツら殺し屋あがりか」

同じく後部座席のサカキが早くも新たなタバコ、自身のメンソールに火を点けながら呟いた。

ニカが頷く。

「系引く太公望の手足ともいうべきフィッシュャーマンズ。ノッポのハウキ頭、顔面ピアス男が穿貫鉤のガザミ ピアサー・ニードル。スモウスタイルの大男が鉄条網の捕獲網、マツコウ チェイン・キャッチャー。殺し屋としちゃ致命的なことに面が

割れた頃にや、連中はナギの部隊の幹部様ってわけさ」

「随分詳しいのな」

ヒイラギがドア上の手すりにしっかりと掴まりながら言った。

「さっきのガザミってのが、これでもかかってくらいのおしゃべりなヤツでな。頼んでもいないのにトライデントの下っ端だった頃の俺にもペラペラと内輪ネタを披露してくれたよ。ガザミによればフィッシング詐欺時代の仲間の裏切り以降、ナギの性格破綻は進んだらしい。本人が言ってたそうだが、仲間なんて二度と信じない、ってな」どこか上の空のような声色の二力。

聞き終えて蝶子が淡々と呟いた。

「……悲しい人だね」

それに対しては賛同しかねるといった二人。サカキとヒイラギではあったが、サカキは何か奥歯に物が詰まったような顔をしていた。サカキが質問を口にする。

「そのフィッシャーマンズがナギお抱えの殺し屋どもだつてのは分かったよ。けどよ、それじゃなんか足りなくないか？」

糸を垂らす太公望。フィッシャーマン専用の鉤、そして網……確かに何か足りないような気がする。

なぞなぞの答えにヒイラギが思案を巡らすより早く、二力が回答を口にした。

「フィッシャーマンズ最後の一人なら、お出ましになったところだ……」

運転席と助手席の隙間から覗き込んだサカキとヒイラギの視線の先、道路の真ん中に立つ黒い日傘を差すか細い影が目映る。

微笑のまま立ち尽くす少女の容貌。

「……疑似餌のチイヌだ」  
フアン・ルアー

40

はつきりとした二重瞼を緩めたまま　張り付いたような微笑／

少女然とした童顔「蝶子と並んでも遜色なし／アツシユオレンジのショートヘアの上に乘ったヘッドドレス　網目状で蜘蛛の巣を思わせる／華奢な肢体には不自然な程に豊満な胸／レースの日傘とフリル付きのドレス　黒尽くめの姿は葬式の帰りを連想」黒尽くめのスーツスタイルのサカキと並んでも遜色なし。

疾走する軽自動車を視界に留めてもチイ又は少女の微笑を絶やす事も避けようとする事もない。近づきつつある軽自動車を眺めては遠い思い出に浸るように微笑み続ける。

こいつは薬かなんかのやり過ぎで呆けているのか？

一瞬ヒイラギがそんな事を考えた時、ふいにチイ又が動いた。黒のドレスの背中をまさぐり、取り出す。それは　。

ドラム状の弾倉。

「……嘘だろ、おい」

ヒイラギが呆然と呟くのが見えたかどうかは分からないが、チイ又は微笑んだまま弾倉を傘の柄の部分にはめ込んだ。

よく見れば、確かに黒の日傘の柄の部分は弾倉をはめ込める程に太かったし、握りの部分には引きがねらしき物が見えた。

日傘を自身の上半身がすっぽり隠れるようにして構える。

「トミーガンかよっ！！」

ヒイラギの叫びざま、先端から弾丸が雨のように飛び出してきた。バラバラとばら撒かれる銃弾に反応するように二カがハンドルを切る。

スリップ音を響かせながらの蛇行運転。

ベルトもしていないサカキとヒイラギは車中で散々に振り回される。

チイ又のトミーガンから放たれた弾丸は風を切って飛び、ついでに空も切った。

一発として被弾しなかった軽自動車がチイ又の脇を通り過ぎる。日傘を持ち上げたチイ又は齒軋りでもするように憤怒を表現していたがその顔は依然微笑んだまま。

「……なあ、ひとついいか？」

ようやく車中の揺れから解放されたサカキが口を開く。  
殺傷能力以前に自身の趣向の為に釘打ち機を振り回すヤツに、怪力を自慢したくて片手でショットガンを装填するヤツに、開きっぱなしの日傘というブラインド越しに銃弾をばら撒くヤツ……。

サカキの思いを継ぐように二力が答える。

「フィッシャーマンズってのは大味で馬鹿な連中の集まりか、だろ？」

サカキもヒイラギも同時に頷いた。

「あながち間違っちゃいないな、なにより大味はナギの好みだ」

苦笑しながら言い終えた二力が運転する軽自動車を、反対車線から猛スピードで通り過ぎた幌張りのジープが急ブレーキ、Ｕターンして追ってくる。その後ろにジャンク山から追ってきた黒塗りのセダン、チイヌが飛び乗ると同時に急発進。

「くそっ」

さっきまでの余裕が一転、二力が小さく言葉を漏らした。

41

二台はぐんぐんと軽自動車との距離を詰める。

その光景をしてサカキは、

「軽自動車とトヨタじゃ勝負になんねえな」

トヨタは車種じゃないだろうに……。内心でヒイラギ、その後で、

「ってか、サカキ何とかしろよ」

私は仕事を放棄します、そう宣言してヒイラギはタバコに火を点けた。距離を置いてのドンパチなぞ自分の出る幕じゃない、とでもいうように。

サカキは期待に比べると、メンドくさそうに銃を抜いた。

窓を開け右の後部座席から顔を出してみるが、右利きのサカキに



は撃ちにくい。

「ヒイラギ、場所変われ」

ヒイラギはあからさまに億劫だ、という顔を露骨にしてみせたが仕方もないので、狭い軽自動車の後部座席でサカキと体を入れ変える。

まさにサカキとヒイラギが後部座席でモゾモゾやっている時に、セダンが急スピードで軽自動車の真後ろまで迫ってきた。

体当たりされる直前、二力がスピードを上げる。そしてそのまま、通り脇の細道に急スピードのまま左折した。

セダンは何とか食らいついてきたが、ジープは曲がりきれずそのまま直進して行った。

アスファルトを染める白にスリップ気味の四本の轍が刻まれる。

その束の間の出来事の中に、サカキとヒイラギは後部座席で転げ回り、何度か頭をぶつけた。

頭を余計にぶつける羽目になるというアクシデントに、ヒイラギの啞えたタバコが一役買っていた。「痛えー！」と「熱いー！」の絶叫大会がひとしきり済んで落ちついた頃、気づけばサカキとヒイラギの位置が入れ変わっている。

ヒイラギはすぐく手際の悪い手品を体験した気分ではあったが、それどころではない。火の点いていないタバコを啞えたまま、必死でどこかに行ってしまった火種を探す。這いつくばり足元を探していると、頭の上で「じゃっじゃーん」と言う声が聞こえる。見上げると、大成功とばかりに両手を広げるサカキに、助手席の蝶子が拍手を送っていた。

落ちていた火種を靴の踵で揉み消すと、ヒイラギはくしゃくしゃになった吸いかけのタバコを物惜しそうにジャケットに仕舞った。

「よくこんな道路知ってんなあ」

二力は車一台走れる細道をジグザグに走る。少しでも間違えば袋小路に追いつめられる、ちょっとした迷路だ。

躊躇せずこの細道に入り正解のルートのみを選択して走るなど極度の方向音痴のヒイラギはともかくとして、このマチ出身のサカキには馴染みの道ではあったが、素人にはなかなか至難のはずだ。

ヒイラギの問いかけに、ニカは余所見などせずに答える。

「一応、元運び屋なんでね」

細道を抜けざまに右折に急ハンドル。わずかの後、飛び出してきた黒塗りのセダンがピツタリと軽自動車の右後方に張り付く。

スペックの違いが勝負の分かれ目。セダンがエンジンを吹かすと、一瞬の内に二台が並ぶ。

セダンの後部座席の窓が降りていく。中から姿を現す少女の微笑。今度はしっかりと閉じた傘の先端を突き出した。

「応戦しろ！！ ヒイラギっ！！」

サカキの声に弾かれるや、窓から身を乗り出したヒイラギがスイツチナイフを振るう。

腕ごと振るった一撃目で傘の軌道を逸らすと、二撃目でチイヌの右手の甲を切り裂いた。

弧を描いて後方へと飛んでいくレース仕様の黒い日傘。

切り裂かれた甲を押さえながらブツブツ言いだすチイヌ。それでも張り付いた微笑はやはり微笑のままで、ヒイラギの背中中は冷たくなる。だから、

「サカキ、チェンジ！ 変わってくれ」

フェミニストでない自分は引き下がるので、後は男のたしなみの申し子たるサカキにエスコートを代わってもらう、というか押し付けようとするも

「ヒイラギ、お前、俺に女撃てつてのかよ？」

サカキの冷たい返事。その間にも俯いたチイヌからはブツブツと念仏のような声。次第にギリギリと齒軋りも鳴り出す。その齒軋りは鋸で鉄でも切るような不快な音。ちらと音の出所を見たヒイラギの顔から血の気が引く。

ギリギリと金音を鳴らすチイヌの歯。人食い鮫のような凶悪な形状のそれは紛れもなく、鋼鉄製の鋭利な人工物　トラバサミを連想。

啞然とするヒイラギに助け舟。表情も変えずギアチェンジする二力から。

「そいつはそもそも女じゃない」

なぜか憐れみに満ちたサカキの声。

「そういうんじゃないだよ。肉体的な話じゃなくてさあ、心が女だったらいつだって女ってことだろうがよお」

サカキが言い終えぬ内に、窓から身を乗り出す微笑のままのチイヌ。さながらホラー映画。

「だから、そいつは体も心も女じゃない。釣られてやってきたヤツを殺したくてウズウズしてる根っからの殺人狂、優先でいったら殺しのが先。表情も変えられなくなるくらい顔やらをいじり続けるのが止められないのは、殺していう自分の趣味を満たすネタを沢山釣り上げてくたしょうがないって衝動が抑えられないだけだ」

声を張り上げた二力の説明、それを掻き消すようにドスの効いた声が響く。

「啞え込んでやる（ファック・ミー）！！　啞え込んでやる（ファック・ミー）！！　啞え込んでやる（ファック・ミー）！！」

ぐんと後ろに首を反らした後で、振り子の原理で振り下ろされるトラバサミ。さながら壊れたからくり人形。

「ぬあっ！」

悲鳴を上げながらスイッチナイフを振り回す。ヒイラギの応戦。ヒイラギのスイッチナイフと、狂気のからくり人形のトラバサミが火花を散らす。とはいえヒイラギは既に泣きそうだ。

「怖えー、怖すぎだよ、何とかしてくれよお」

軽自動車のドアすら噛み砕く勢いのトラバサミを弾き返しながらのヒイラギの情けない声に、さすがに不憫になったサカキが二力に声を掛ける。

「何とかしてやれよ運び屋あ」

無言のままで二力はギアを変える。一瞬緩めたスピードが急加速、そして再びの路地へと逃げ込む。後ろへと張り付くセダン。気休めの時間稼ぎ。肩で息するヒイラギが2ラウンド目を待つファイターのように呼吸を整える。

路地は思いの他に短い。Ｔ字路へ抜けざま二力が左折にハンドルを切った。黒塗りのセダンを引き連れ、軽自動車は狭い川沿いに走り出す。見れば、川を挟んであっさりと追いついた先程の幌張りのジープが並走していた。

サカキとヒイラギが同時に声を上げた。

「おい、運び屋あ！！」

二力は無言のまま運転に集中する。

バタバタと風にあてられていたジープの幌が飛んでいった後で、ジープの後部に隠れていたものが姿を現した。

ブローニングM2重機関銃。通称、メドゥーサ。

「よお、ゴミクズども」

並走するジープからの声が聞こえる程に川は狭く、距離も近い。ジープの後部に設置された重機関銃に寄りかかる男が嫌な笑みを浮かべる。

二力の怒号と共に一瞬、軽自動車の運転が荒くなる。

「ナギいいいい！！！！！！」

42

そして悪夢の再来。

「啞え込んでやる（ファック・ミー）！！ 啞え込んでやる（ファック・ミー）！！ 啞え込んでやる（ファック・ミー）！！」

後ろから近づきつつある声に、ヒイラギがびくりと身を震わせる。ニヤニヤというナギの笑みがピタリと止む。一重瞼の瞳、どんよりと濁ったそれが憎悪の色と混じりあい、睨めつける。

それを肌で感じた二力がアクセルをおもいきり踏み込んだ。

瞬間　重機関銃から発射された無数の弾丸が、川沿いに長い間放置された植葉樹の垣を無茶苦茶に撃ち抜いた。葉やら枝があちこちに飛び散り、それは最終的にチイヌと黒塗りのセダンをも蜂の巣にした。

コントロールを失ったセダンが川側に落下。二度の横転の後、爆発。炎上。

「……マジかよ……マジでくわえ込ま（ファック）されやがった」  
呆然としたヒイラギの声。それに反応するように、蝶子が恐る恐るセダンへと視線を移そうとする。怖いもの見たさ〓天性の好奇心。「見るな――！」

二力が声を荒げる。普段聞いた事もない厳しい口調は子供を叱る保護者のようで、こくんこくんと蝶子は何度も小さく頷いている。

そんな中、

「くそがああああ――！！！！」

駄々を踏みながらナギの怒号がこだます。その声に、良くも悪くも全員が我を取り戻した。

重機関銃の銃口はちろちろと軽自動車の様子を窺っている。

「やべーって、早く何とかしろ、サカキ――！」

「お願い、早く！　早く――！」

ヒイラギと蝶子の声が重なる。

「ナギさん真つすぐ撃つんじゃないスよ！　薙ぎ払わねーと――！」

「なんだそりゃ！　冗談のつもりか、コラ――！」

ジープの運転手の声と、ジープ運転席後部の鉄板を蹴るナギの声も同時に重なり騒音を撒き散らした。

「なんつー四重奏だカルテット――！」

ぶつぶつと文句を言いつつも、現状を把握したサカキの顔にまざまざと表れる激しい後悔。

川を挟んで軽自動車は左側、ジープは右側。そして自身は軽の左後部席……。

「……って俺、そっち側じゃなきゃダメだろっ！　なんで位置変えたー！！」

変われつつったのお前だろ。喉元まで出かった言葉をヒイラギは抑える。ここで言い合っている時間も、ましてや体を入れ替えている余裕もない。

ナギが機関銃のスイッチを押した。バラバラと薬莢をばら撒きながら発射される弾丸は、再びスピードをあげた軽自動車の後方の植葉樹を無茶苦茶にしながら確実に近づいてくる。

狭い後部座席で左手をしっかりと屋根に固定するやサカキが叫んだ。

「ヒイラギ、イス倒せ！」

ヒイラギが後部席ごと倒れこんだ瞬間　サカキは引きがねを引いた。

サカキの無茶な体勢にも関わらず、後部に倒れこむヒイラギのすぐ眼前を通過した弾丸は　軽自動車の右後部側の窓を抜け　ジープの左前輪を完璧に打ち抜く。

ジープのスリップに合わせて不規則に上に下にぶれながら弾を吐き出していた重機関銃は、二回転して辺り三百六十度を蜂の巣にした後、ジープの横転でようやく停止した。

思い出したように取り出した吸いかけのタバコを、手向けのように窓から放りながら、ヒイラギが呟く。

「いつそ、今ので死んでくれるとありがたいな」

車内に広がる無言の空気は同意の表れ。

軽自動車は後ろを振り返る事も立ち止まる事もなく、マチの外を目指す。

## 花と蝶 5

43

M市を目指す軽自動車は峠に差し掛かっていた。峠に近づくにつれ、路面の凍結は厳しさを増す。夏にここを通った時はサカキが、自分が運転すると言って聞かなかったが、この路面状態ではさすがのサカキも大人しくしている。

二力の運転は安定していた。厳しい路面の中にあっても、サカキの通常時の安全運転よりもスムーズにM市に近づきつつあった。

マチの出入り口は国道脇の山道から抜ける方法と、港から抜ける方法の二つあったが、二力はトライデントの足元たる港を敢えて抜ける方を選んだ。当然港にはトライデントの検問が敷いてあったが、ナギが不在で指揮系統を失った検問を抜けるのは驚く程に容易かった。

途中で立ち寄ったドライブインで、一同は二日ぶりにまともな食事でありついた。

サカキは定食の御飯を食べながら、お米には666の神様がいるのだからもつと味わって食べるべし、そんなことを切々と語っていたが、言い終えて蝶子に神様は108だと訂正されていた。

「666じゃ悪魔だよ」

少し遅めの朝食の後、蝶子から二日分の給料、一人につき二万円ずつが支給された。それをドライブインで両替した後で、ヒイラギは外の自販機に向かった。

駐車場では二力が軽自動車を見ている。あれだけナギがばら撒いたにも関わらず弾丸は、軽自動車の後部二カ所に弾痕を残しただけだった。

「お前の顔と一緒にだ……」

二カにサカキが声を掛け、ドライブインの隣にあるコンビニから買ってきたガムテープを手渡した。

弾痕を隠すようにガムテープを貼る二カを見つめながら腕を組んで、ひとしきり考え込む素ぶりを見せた後でサカキが口を開く。

「……スカーフェイスじゃなくてかすり傷」スクラッチ

サカキは、ナイスアイデアと言わんばかりに一人頷く。

「二カは二カだよ」

サカキの後ろでやってきた蝶子が頬を膨らませ、むくれる。自分のおもちやを取りあげられまいとするような必死の抵抗にも似たそれは、童顔の彼女を一層幼く見せた。

サカキが苦笑いを浮かべた。

その様子を離れて見ていたヒイラギは、自販機に向き直すとにらめっこを再開する。

前に立ち寄った時に買った無駄に甘いメープルローストバナラ味の缶コーヒーはもう無かった。

スタンダードな物以外、新しいヤツが出てきては淘汰され、また新しいヤツが出てくる。

マチと一緒にだ。

そんな事を考えながら、ヒイラギはメンソール風味なる缶コーヒーのボタンを押した。

44

「しかし、五分とかからず十万も稼ぐわけだから、ぼろいもんだよな」

M市内の銀行で、ドリームキャッチャーへの支払いを済ませた蝶子にサカキが声をかける。

「ん、二十万にしないとよ」

蝶子があっけらかんと答える



「!? ……二十万!?」

せつかくまけて貰ったのに何故、と尋ねるサカキに蝶子はこれまたあっけらかんと答えた。

「だってデートしたくないし」

M市内を10分程走ると軽自動車は、築後結構な年数が経つであろ、さびれたビルの前で停まった。

「本当にここか？」

ヒイラギの問いに「おそらく」と答えると二力はビルの二階の窓を指さす。

そこには確かに「亀ヶ澤探偵事務所」と表記されていた。

これでカメガサワ間違いでないかぎり、携帯の持ち主は本人という事になる。

四人は近所の有料駐車場に車を停めた後、亀ヶ澤探偵事務所の入っているビルの入り口へと立った。

郵便受けを見る限り、その事務所はさっきの窓に表記されていた二階部分にあるらしい。

携帯を二力から受けとるとサカキとヒイラギは二階へと向かう。顔の知られている二力と、やる気だけは人一倍ながら足手まといの蝶子は一分たってから来るように、と指示を出しておいた。

蝶子と二力をビルの入り口に残したまま、サカキとヒイラギは亀ヶ澤探偵事務所のドアの前に立つ。

サカキが携帯でワタナベヨシノブをリダイヤルする。

事務所の中から着信音と、覚えのある着信履歴に慌てたのかドタドタいう音がした。

それを確認した上でヒイラギは踏み込んだ。

安物のスーツを着た青い顔をした中年は、あっさりとヒイラギにナイフを突きつけられた。

呆然と立ち尽くす、その男は状況を一切理解できていなかった。

力ない右手から着信音の鳴ったままの携帯が床に落っこちる。

「こ、こんなトコ襲ったって金なんかないぞ」

ナイフの金属特有の冷たさ。喉仏に感じるそれを極力刺激しまいとでもいうように、男は一語一語ゆっくりと話した。

のんびりと部屋に入ってきたサカキが携帯を切ると、床に転がる亀ヶ澤の携帯も鳴るのをやめた。

「いやそういうんじゃない、オレら、ウツバスターの方」

亀ヶ澤の顔が更に青くなる。

「当たり前だね」

ようやくの進展。出口の見えない面倒事に一筋の光を見出せたことに、ヒイラギの声も明るい。

そこへ遅れて、恐る恐る蝶子が事務所の中へ入って来た。

ニカもその後続く。

部屋の中は薄い頭髪を撫で付けた安物のポマードの臭いがした。

その臭いの出元たる亀ヶ澤は青白い顔をして、ただ上の歯と下の歯をカチカチと鳴らしている。

最後に事務所に入って来たニカだったが、一瞬の内に表情を強張らせた。

そのままズカズカと直進すると、ヒイラギがナイフを首筋に当てているのもお構いなしに、亀ヶ澤の胸ぐらを掴む。

そして、壁に叩きつけながら言った。

「なんでこんな所にお前がいる？ …… ツルミ」

45

「は？」とサカキと蝶子が言うと同時に、ヒイラギが「誰だっけソイツ」と尋ねた。

「ほら、トライデントの取り引きでニカをはめたっていう……」  
ヒイラギが大げさに「ああ！ アイツね」と納得してみた。

他意があつたわけではないが、そのやり取りを見て亀ヶ澤も思ひ出したらしい。

「あ、あんた……あの時の……」

これが目を白黒させるというヤツか、ヒイラギは感慨深げに亀ヶ澤を覗き込む。

「……って事はあんた達、あのマチの人間か？」

「そうよ！」

マチとは一番関係性の薄い蝶子が堂々と言い切った。

「……何てこつた…最悪だ……すいません、勘弁して下さい、勘弁して下さい」

最初から見る影もなかったが、亀ヶ澤の戦意はここで完全に喪失した。

相手がマチの人間であるという事は、マチの存在を知る者には十分すぎる程効果があるらしい。亀ヶ澤という男が、元々探偵としてのプライドを持っていたかどうかは別として、「命さえ、助けてくれるなら何でも答えます」と言い出すのに時間はほとんど掛からなかった。

「あなたが渡辺さん殺したの？」

蝶子が尋ねる。

「違います……殺したのは、渡辺の妻の真樹です」

亀ヶ澤は従順に答えた。

「何で、保険金ねらいかなにか？」

「そんなんじゃないですよ。保険金も入るにや入るでしょうがたかが知れてるって言うてました。真樹の理由は男、単純に浮気相手との今後に渡辺が邪魔だったってことです」

蝶子は呆れて声も出ない。ニカが順を追って説明するように言うと、自分は大したことはしてないと言い訳がましくつけ加えた後、亀ヶ澤はペラペラと喋り出した。

真樹が渡辺のパソコンで渡辺のふりをしてウツバスターに潜りこ

み、自分に怪我を負わせる依頼をした事。

その後、雇われた亀ヶ澤が、渡辺の帰る道程を知らべ襲う場所を特定した事。

そして亀ヶ澤の番号を渡辺のものと二力たちに伝え、亀ヶ澤が二力の携帯に襲う時間帯の調整を図った事。

とどめを刺すのは亀ヶ澤の仕事だったが結局出来ず、同窓会というアリバイ工作までしていた真樹が気絶する渡辺の後頭部を石で叩き潰した事。

あまりに亀ヶ澤がペラペラと喋るので、今までの苦労を想ってサカキとヒイラギは泣きたくなる。

「あの女は簡単に息の根を止める、なんて言っていましたけど、自分には無理だったんですよ。気絶する渡辺をしばらく眺めてたんですが、やっぱり出来なくてあの女に連絡したら、血相変えて飛んできました」

自分は殺してない、と弁解がましい亀ヶ澤に二力が冷やかに言葉浴びせる。

「自分が直接やってないにしろ、お前のせいで俺には殺人の容疑がかけられるかもしれないんだけどな」

亀ヶ澤は機嫌をとるように作り笑いを浮かべた。

「でも、あなた達にはまだ嫌疑をは掛かってないですよ。警察が通り魔事件として取り扱っている間は大丈夫です。ウツバスターと渡辺のパソコンは、自分が疑われた時の保険だつて真樹は言っていましたから」

亀ヶ澤の媚びた笑顔にイラつく二力は別として、サカキとヒイラギには安堵感が広がっていた。

真実は手に入れた。

自分達の仕事は終わったのだ。あとは二力と蝶子で結論を出せばいい。

面倒事からようやく開放されると喜ぶヒイラギに目もくれずに、二力が質問を続ける。

「今度は個人的な質問だ。二年前、俺をはめて手に入れた金はどこにある？」

大金を持っているとは到底見えない薄汚れた男は、再び作り笑いを浮かべた。

「ああ、あの金なら……」

46

昼から夕方へと向かう束の間。冬の澄んだ空気の中、いつもの見慣れた風景を見下ろしながら、ヒイラギが自らに問うように呟く。

「……何の因果でこうなってるんだろな」

狂言的通り魔事件の真相を聞き出した時点で、サカキとヒイラギはお役後免となるはずだったが、亀ヶ澤から金の在り処を聞き出すと、蝶子はもう少しつきあってほしいと言い出した。

ヒイラギが文句の一つも言い出す前に、サカキは申し出を謹んで引き受けてしまった。

そんなわけで、四人はM市から、せつかく命からがら逃げ出したマチにトンボ帰りする羽目になった。

二力が二年前にはめられて、奪われた金は結局の所マチから持ち出されてはいなかったのだ。

マチに至る山道には入らず、国道を少し上がった寂れた商店の駐車場に車を停める。

さすがにわざわざ逃げ出したマチに今日のうちに戻ってくるとはトライデントも思っていないだろうが、大手を振って港を通るわ

けにも行くまい。

山道の様子を見に行つたサカキが、タバコをふかしながら気だるそうに戻つてきた。

「ダメダメ。ナギ人使いの荒さには頭が下がるよ。今日の今日だつてのに、山道も検問は敷かれたまんまだ」

サカキの言葉には、実直な仕事ぶりに対する敬意と共に、ナギの下で働く者達への同情が入り混じっている。

「で、どうする？ 強行突破でもしてみるか」

ヒイラギがやるも気なく言つた。言つてはみたが無理があるのは承知の上だ。

「それは賢い方法じゃあないな。今の装備じゃあ心許ない」

サカキが銃の残弾を確認する。回転式の弾倉には六発。ポケットを探ると一発だけ出てきた。ヒイラギにしても、仕込みやすいが殺傷力には劣るスイッチナイフが数本だけである。

「それに朝のドンパチで他の組織も気づき始めているだろう。検問を上手く抜けたところで、マチ中密告り屋だらけじゃトライデントの連中に囲まれるのも時間の問題だな」

サカキがタバコを商店の灰皿でもみ消す。

「……ヒイラギ、小銭もつてる？」

サカキが小銭をせびる。ヒイラギが「自分のを使え」と言つと、財布も見ずに「今切らしてる」と答える。

「で、どうすんだ？ 何か当てがあつたか？」

十円玉を手渡すと、サカキは駐車場の角にある年代物の電話ボックスへ向かつた。

マチの中には電話屋と呼ばれる職種の人間がいる。

主な収入源は携帯屋と同じようなものだが、彼らはさらに違法でマチの建物に電話回線を引くという技術も持ち合わせている。

サカキとヒイラギの事務所にある電話は回設費のみで利用料金が掛からないがマチの中でしか使えないタイプだが、利用料の一割を

電話屋に支払うことで、マチの中も外も使えるタイプが一般的には普及している。

サカキが電話ボックス内の落書きの中から目当ての番号を見つける。

ダイヤルを回すと二回目の呼び出し音の後、電話がつながった。

47

程なく、サカキ達の待つ駐車場に白いライトバンが停まった。

「一体何しでかしたの、あんた達。マチの中、弾痕だらけにしちゃって」

ライトバンから降りながら、ナイキが呆れ顔で聞いてきた。

細見のデニムにタイトなカーディガンを羽織っただけのシンプルな装いに、スタイルの良さが一段と映える。

「オレ達じゃあねーよ。ほとんど、っていうか全部ナギがやったことだよ、あれは」

弁解がましくサカキが答える　とはいえ、本当の事なのだが。ほぼ同じ身長の二人は真正面を向き合って話を続ける。

ライトバンの運転席に近寄ると、ヒイラギは窓越しに運転席のもじやもじや頭に声をかけた。

「今日はクソチビは、一緒じゃないの？」

もじやもじや頭の男は、憂いのある瞳でヒイラギの顔を見ると、少したけ口元を緩めた。

「ああ、マニバフィカなら今日は仕事がないから海岸の方に行ってるはずだ」

チビだのなんだの言いつつも、ヒイラギはマニバフィカを気に掛けているんだな　クラウドの微かな笑みがそう言っている気がして、

「このくそ寒い中、ご苦労なこつたね」  
ヒイラギはわざとらしく悪態をついた。

「……ふうん、それでナギに追われてるわけ」

サカキから事の次第を聞き終えると、ナイキは興味があるのかなのか分らないような顔をしながらも、一応納得して見せた。

「それで、ナイキたちに頼みたいのは、俺達を事務所まで連中にバシないように連れてってほしいってことだ。もちろん金は払う……あと、ついでに乳揉ませろ」

ナイキは緩いウェーブ掛かった髪の毛を、左手でくしゃくしゃと触りながら、後ろへ向き直った。それに伴い、黒いカーディガンが貼りつく彼女の格好の良い胸もサカキの視界から消えた。

サカキの後半の言葉を真に受けたわけなどではなく、仕事を受けるか否か依頼者の顔を伺わずに考えるのがナイキの習慣であった。その彼女の背後に忍びよった人影が、後ろから両手でナイキの左右の胸に抱きつく。

「ちょ……ちょっと、何してんのサカキ!!」

慌てるナイキをよそに、少し離れた場所で気だるくサカキが声を上げた。

「俺じゃねーよ」

ナイキが後ろを振り返ると、小柄で童顔な女が自分に抱きついている。

「すご、本物だ。これ本物だ」

蝶子が彼女の愛らしい大きな瞳を、さらに大きく丸くしながら上言のように繰り返す。

なぜかサカキが得意げに言った。

「な。だから言ったら、ナイキのは作りモノの巨乳じゃないって」

蝶子が何度も頷く。感動なのかなんなのか、

「あーうーあー」

と繰り返している。



俗に言う、言葉にならないって言うのはこういうことかと納得して、サカキも頷いて見せる

ナイキは蝶子を諫めようと必死だ。

「ちょ、あのね、お嬢ちゃんも大人になればこれくらいになるから」  
蝶子の平たい胸元をフォローするでもなく、遠くからヒイラギの  
声が聞こえた。

「ソイツ、もはや二十一歳だって」

48

四人が隠れて乗るライトバンはあっさり検問をクリアすると、程なく事務所に着いた。

レンタカーの軽自動車は、商店で米袋一キロを買う代わりに一晩置かせてくれと頼んだら、店主は快く応じてくれた。マチと町との境界線に住む人間は物分かりが良くて助かる。  
グレースーン

依然、気のりしないヒイラギだったが、蝶子が仕事が付いた際の報酬を倍に言ったことでモチベーションも上がった。その上がり具合たるや、商店の駐車場に隠す事になった軽自動車相手に「必ず戻ってくるから待ってるよ」と惜別の言葉をかける程のものである。

蝶子がナイキに報酬を支払う。

「蝶子ちゃん可愛いから、何か悪い気がするなあ」

お金を受け取りながらナイキが苦笑いを浮かべる。

四人が降りるとライトバンは走り出す。角を曲がって見えなくなるまで蝶子は手を振っていた。

事務所に戻ってきたのはたかだか一日ぶりにもかかわらず、サカキは「やはり我が家が一番」と言い、ヒイラギは壁の落書きが増えたような気がしていた。

事務所へ向かおうと歩き始めたサカキが、事務所の二階窓に何かが反射して光るのを認め、歩みを止める。事務所の向かいのビルを、首だけ振り返るとゆっくり見上げた。

ほぼ同時に、事務所のスイングドアがゆっくりと開いていくのをヒイラギは見つめていた。

「よお、遅かったな。先に始めてたぜ」

中から出てきた身長瘦躯の男の右手には缶ビールが握られている。今夜ってパーティーでもありましたっけ？ ジンさん

ヒイラギが皮肉まじりの探りを入れる。  
嫌な笑顔を浮かべたジンがそこにいた。

「バツカ、おめえ。パーティーってのは夜やるもんだろっが。まだ三時すぎだぜ？ 仕事の時間だっつーの」

ヒイラギは真つすぐジンの瞳を見据えた。

「仕事って何の？」

歪な口元　それが尚更に歪む。

「取り立てだよ。取り立て」

居心地の悪い空気が増していく　何かまずい展開になりつつある。

「お前ら、ナギんどこに追われてんだってな。連中に殺される前に返してもらわねーといけねーだろ？ 図書館での貸しをよ」

サカキが会話に加わる。

「どうして、オレ達の行動を？」

「やりたがり」のジンが、話を折られて少し苛立ちを見せた。

「そんなの決まってるだろ」

そう吐きすてると、事務所前の通りへと視線を送った。

サカキも、ジンが顔を向ける方　ライトバンが走り去った方を見つめ呟く。

「あんにやる」

「なあ、サカキい。そんなのはどうでもいいことだろうよ。問題は、お前らが俺の欲しい物をもっていないってこと、その一点だけだろ」

うがよ」

ジンが笑顔を取り戻す　瞳が爛々と輝く。

「取り引き起きねー以上、オレは何を取り立てりゃいいと思う？」

ジンはサカキに向かって斜めに立つと、大きく右手を振り被る。

折り曲げた右肘で耳を隠すように、対称的に脱力した左手をだらりと下げた　独特の構え。

「サカキとヒイラギ、一度やりあってみたかったんだよなあ」

嫌な笑顔は最高潮に達し、大きな口の端が耳元まで引き裂かれた。

49

ヒイラギが臨戦体勢に入る。

隠していた仕込みナイフを出そうとした瞬間、サカキが声を上げた。

「抜くなヒイラギ!!」

ヒイラギの動きがピタリと止まる。

「俺たち、やんねーっスよ。ジンさん」

サカキの言葉に、ジンの表情が少し曇り、怒りを露にする。

「オイオイオイオイ、コツチはココまでテンション上げちゃってんだよ！　弾けさせるよ！　なあ！　すぐに済むからよオオオ!!」

サカキが淡々とジンに尋ねる。

「オレが銃を抜いたら、ですか？　それともヒイラギがナイフを抜いたら？　どっちがスイッチなんです？」

ジンは何も答えない。

「後ろのビルから、ヘイズがヤツの愛用のライフルで俺らを狙ってんでしょ？　そんな中でジンさん、あんたの思い通りには動かないですよ」

サカキは微動だにせず、ただ、じつとジンを見据えた。

「それを当てて見せたからって、お前らの状況が好転するわけか？」  
ジンの嫌な笑いは変わらずだったが、その規模は薄ら笑い程度の

ものになっていた。

それを見ながらヒイラギは「攻撃色が薄れてきた」と内心で呟く。そして、

がんばれ、サカキ。虫笛はないけど。

エールを送った。

「……予想外の事が起きてるよ、ジンさん」

サカキがゆっくり、しかし力強く話かける。

「ライフルで俺達のどっちかを始末出来たとしても、もう一人は残る。一対一なら問題ないつもりなんだろうけど、スナイパーがいるってバレてる時点でそれは奇襲にならないから、残った一人は最初から死ぬ気であんたを狙える。ライフルは撃った後、装填してから狙いを定めるまで時間が掛かるから、その点は安心だ」

サカキは少しだけ間を置いた。それはもちろん考える時間を与える為だ。

ジンは純粋な戦闘狂ではない。

戦闘はもちろん好きだが、それ以上に気持ち良く勝利を得たいのだ。スナイパーであるヘイズを要職につけているのもその為である。

「ここで予想外の登場だよ、ジンさん。後ろのニット帽の男、二力くんはかつてトライデント、ナギ部隊を敵に回して二発の銃創のみで生還を果たした男。戦闘力でいえば俺には及ばないだろうけど、ヒイラギと同じくらいの強さは持ち合わせている。あんたは、俺とヒイラギ相手のつもりだったんだろうけど、実際は一対三だったってことだよ」

それを聞きながら、ヒイラギはエールを送る相手をジンに乗りかえた。

しかし、当のジンは歯切れが悪く、言い訳がましい。

「数的不利は認めてやるけどよ。俺はそもそも皆殺しにするつもりだったっの」

ジンの歯切れの悪さに業を煮やして、ヒイラギが噛み付く。

「ジンさあん、オレら簡単には殺れねーっスよ？」

マチで一目置かれるサカキとヒイラギを殺したとなれば、自慢のタネにはなるだろうが、扱いたのは所詮マチのチンピラと何ら変わりのない二人である。負けでもしようものなら非常に格好がつかない。

気持ち良く戦って、気持ち良く勝利を得たいジンという男は、ここに来て完全に悩み始めた。

それを確認すると、サカキがとっておきの言葉を告げた。

「……俺達を取り引きがしたい」

「ああ、っ!？」

聞き返すジンの顔には、これ以上話をややこしくするなという苛立ちが見える。

お前らには取り引きできるような代物がないってさっき言ったばかりだろう、ジンがそう言うより早くサカキが口を開く。

「エンシノさんへの借り、返してしまいたくないスか? ……」

サカキの話を聞いてしばらく考えこんでいたジンだったがふいに「あれ、見る」と指さした。

通りを一匹の黒猫がやって来ると、サカキとジンの間を横切った。マシロと呼ばれるその黒猫は、ヒイラギの知る限りこのマチで本当の自由を体現する唯一の存在だった。

ジンがゆっくり構えを解く。

「……縁起が悪くて殺し合いなんてやってる場合じゃねーな……お前らの話乗ってやるよ」

二階にあるサカキの部屋の窓から、向かいのビルの屋上に、夜の闇に紛れてぼんやりと人影が見える。ジンがトライデントに襲われないよう見張りを置いていったとのことだが、本当の所は、サカキたちが逃げないか見張っているのだろう。

事務所は特に荒らされた形跡はなく、冷蔵庫並みの寒さを維持してくれたおかげで新巻鮭は勿論、いくらも無事だったので、なかなか豪華な夕食を堪能することが出来た。

サカキは机に向かって愛用のS&W、M60通称 Lady Smith を分解しては、入念に手入れしている。

その銃について、俺のレディがスミスさんじゃおかしいと言って、サカキはただレディと呼んでいた。

一時期ルーシー（死天使）と呼んでいたこともあったが、しばらくしてレディに戻った所を見ると、あまり気に入らなかつたらしい。故に、サカキのレディは依然、レディのままである。

サカキの隣でヒイラギも鼻歌まじりでナイフの手入れをしている。

「お前、それ使うの？」

サカキがそれと呼んだ大型ナイフはヒイラギいわく、とっておきの三本の内の一本だった。

片刃のナイフで、背にあたる部分には一センチ間隔の凹凸おつとつが並んでいる。

「うん。なんてったって報酬倍額だもんね。オレもこいつも張り切っちゃうよ。クソつたれのフィッシュマンズども、今度会ったら力ニヤローのイカれたあの爪を叩き割ってやんのさ」

ヒイラギがソウルイーターと呼ぶ大型ナイフの刃が、蛍光灯の光を反射して輝いた。

一階のソファに寝転がって、二力は部屋の角の闇をぼんやりと見つめていた。

「二カって寝る時も帽子被ってるんだね。ハゲちゃうよ」

ふいに声をかけられた方を見ると蝶子が立っていた。

蝶子は、二力が起き上がって空いたソファの隙間にちょこんと腰掛けた。

二力が掛けていた毛布を蝶子に掛けてやると、蝶子は毛布の半分を隣に座る二力に掛け、足りない毛布の長さを補うようにピッタリと二力に寄り添った。

「ねえ、二力」

月明かりの差し込む、ぼんやりとした闇の中で蝶子の声がした。

二力は無言で聞いていた。蝶子の言いたいことは何となく分かっていた。また、怒られるか、泣かれるだろうが二力に釈明の余地はない。

「二力、自分は死んでも、あたしだけ助けるつもりだったでしょ」

そうだ。その為にこのマチに戻ってきたわけだし、サカキとヒイラギを巻き込んだ。

二力の無言は全てを肯定する。

「でも、もうそんな事言わないで」

二力はゆっくりと蝶子の顔を見た。以外にも、そこには怒りも悲しみもなかった。

「花と蝶はずっと一緒じゃないとダメなんだよ」

二力は初めて蝶子が心から微笑むのを見た。

紛い物じゃない少女の笑顔が、月光に照らされてキラキラと。

愚かさを呪う気持ちと、自分を殺そうとした者への怒りの中で、一人無様に生き長らえてきたつもりだった。

しかし 一人じゃなかった。

今までも。

そして、これからも。

「……ああ」

打ち震えるように心から絞り出すと、ニ力は鳴咽を止めることも出来ずに泣いた。

51

ゴン

地面が一瞬激しく揺れたかと思うと心地よい睡眠は妨げられた。寝惚け眼で蝶子を見ると、歯ブラシをくわえたヒイラギが立っている。

「はに、ひへんは。はっはふ」

歯ブラシをくわえたままで何を言っているのかは良く分からなかったが、自分が目覚めたからソファの足にもう一撃を加えられなかったというのは理解出来た。

蝶子とニ力はソファの上で目を覚ました。

闇の中では分からなかったが、日中こうして見るとよくこんな狭い所で二人寄り添って熟睡できたな、と蝶子は一人感心した。

ニ力はヒイラギの姿を確認するといそいそと愛用のニット帽を目深に被る。

昨夜、ニ力は暗闇の中、蝶子に心の殻を脱ぎ捨て、ありのままの自分をさらけ出した。

ついでに、ニット帽も、だ。洗面所に向かったヒイラギはそれに気づかない。

「まったくよお蝶子、お前にわざわざ部屋貸してやる為に、人がせつかくあんな狭い所で寝てやってんのにさ」

一度、口の中の泡を洗面台に吐き出してくれたおかげで、ヒイラギの言葉は大分聞きやすくなる。

「お前ら、こんなトコ好奇心大王に見られたら、大変だぞ？」



蝶子は、話すヒイラギの格好を不思議そうにまじまじと見た。

「何？ その格好？」

ヒイラギはトレードマークのふんわり尖らせヘアーはいつものことながら、ジャケットにはいくつものバッジをつけ、ズボンの裾はブーツの中に入れている。

身につけた黒のスーツは昨日M市の店で買ってきた物だ。市内の店を廻り、気に入った物を見つけるのに二時間も要した。

蝶子が、皆で揃いのスーツを着ようと言い出したのがそもそもの始まりだが、亀ヶ澤の事務所を探したとき以上に、亀ヶ澤を尋問したとき以上に時間が掛かった為、乗り気のサカキとは対照的にヒイラギは不平不満たらたらだった。

「いいの。オレはこれでいいの。オレ流のくずしなの」

言い訳するヒイラギだったが、本当は揃いのものを着るのが恥ずかしかつたのかもしれない。

「だって、ヒイラギ、Ｙシャツも着てないし」

ジャケットの下は長袖のＴシャツだった。

「マフラー巻くからいいの。それより二カも蝶子も早く準備しろ。まあ、サカキが髪をセットする時間は尋常にかかるから、大丈夫だろうけどさ。まあ、あいつの計算された無造作感ってのが、俺には理解不能だけど」

二階からサカキの声が響く。

「ヒイラギ、お前のブーツ借りんぞ」

ヒイラギはうがいをしながら張り上げた。

「返す時は利子つきだ」

「オレのビーサンつけてやる」

すかさず声が二階から返ってくる。

うがいを終わるとヒイラギは事務所を出ていった。  
昨日隠してきた軽自動車を取りに行くのだと言う。

「ヒイラギって運転できたんだね」

蝶子が言うと、去り際に「なめんな」と返ってきた。

ヒイラギが出ていった後の余韻を引きずるように、ギシギシと揺れるスイングドアを見ながら、

「あれ？」

蝶子が呟いた。

不思議そうにニカが蝶子の顔を覗き込む。

「……私、始めてヒイラギに名前で呼ばれた」

蝶子は、覗き込むニカの顔を見つめながら声を上げて笑った。

確信なんて何もない。でも予感はある。一年前より一ヶ月前より、昨日より今日は良い一日になる。

今日こそは、私達にとって記念すべき、新しい始まりの日になるのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1925x/>

---

花と蝶 R・N・O/2

2011年11月13日03時23分発行